

# 益田拠点工業団地造成工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書

1996年3月

益田市教育委員会

# 序

益田市は広大な平野部を抱えて、山陰と山陽を結ぶ交通の要衝として古くから栄え、島根県西部地域における政治、経済、文化の中心的存在として発展してきました。これを裏付けるようにスクモ塚古墳や大元1号墳等の大型古墳や典型的な群集墳である鶴ノ鼻古墳群など著名な古代の遺跡が多数存在し、さらには、右見全城に勢力を誇った中世の有力豪族益田氏に関連する遺跡群や神社仏閣も数多く知られています。

また、近年は全国的に埋蔵文化財の発掘件数が増加する傾向にありますが、益田市においても発掘調査の機会が増加しつつあります。こうしたなか、今回は島根県土地開発公社からの委託を受け、益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として虫追町羽原の本田窯跡、藤原窯跡の調査を実施いたしました。その結果、近代におけるこの地域の基幹産業であった瓦生産業の解明に参考となる貴重な資料を得ることができました。また、近代の窯跡の発掘調査は県内でも数例しかなく、その点でも非常に有意義なものとなりました。

本書は、この発掘調査の記録をまとめたものであります、多少なりとも当地域の歴史を解明する手がかりとなれば幸いです。

発掘調査にあたり指導をいただいた先生方、また終始ご協力をいただいた島根県土地開発公社をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げまして、報告書刊行のごあいさつといたします。

平成8年3月

益田市教育委員会

教育長 田 中 稔

## 例　　言

1. 本書は平成7年度（1995年度）に益田市教育委員会が島根県土地開発公社の委託を受けて実施した益田拠点工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要である。

2. 発掘調査を行なった遺跡は次のとおりである。

　本田窯跡　　益田市山追町所在

　藤原窯跡　　益田市山追町所在

3. 調査は次のような組織で行った。

　調査主体　　益田市教育委員会 教育長　　田中　稔

　事務局　　岡崎松男（生涯学習課長）・下瀬俊明（同課長補佐兼文化係長）・斎藤　守（同主任主事）・木原　光（同主任主事）・長嶺勝良（同主事）・長澤和幸（同主事補）

　調査員　　熱田貴保（島根県埋蔵文化財調査センター企画調整係主事）  
　大畑哲也（益田市教育委員会生涯学習課文化係主事）

　調査指導　　村上　勇（広島県立美術館主任学芸員）

4. 発掘調査、整理作業には次の方々に参加していただいた。

　石橋定子、石橋美登、岩本末子、岩本哲夫、岩本祥枝、大島　操、大谷ひとみ、大山和子、大畑和子、岡本敬子、杉内恵美子、高橋輝吉、中尾貞子、中村　了、藤井典子、藤原百合子、松岡知江乃、真庭小巻、柳井友吉、山地喜三男、横出貞代

5. 発掘調査の実施にあたって次の方々（敬称略）に多大なご協力ならびにご指導をいただいた。記して謝意を表したい。

　藤原富久人、藤原史義、三井建設・大畑建設特別共同企業体、柳浦俊一（島根県埋蔵文化財調査センター調査第5係主事）

6. 掲図中の方位は磁北を示している。

7. 本書の編集、執筆は大畑が行なった。

# 目 次

I. 調査に至る経過 .....	1
II. 遺跡の位置と歴史的な環境 .....	3
III. 羽原地区の歴史について .....	5
IV. 調査の概要 .....	8
1. 本田窯跡 .....	"
(1) 沿革と現況 .....	"
(2) 発掘調査 .....	9
(3) 本田窯跡の遺物について .....	16
2. 藤原窯跡 .....	25
(1) 沿革と現況 .....	"
(2) 発掘調査 .....	"
(3) 藤原窯跡の遺物について .....	35
V. まとめ .....	43



## I. 調査に至る経過

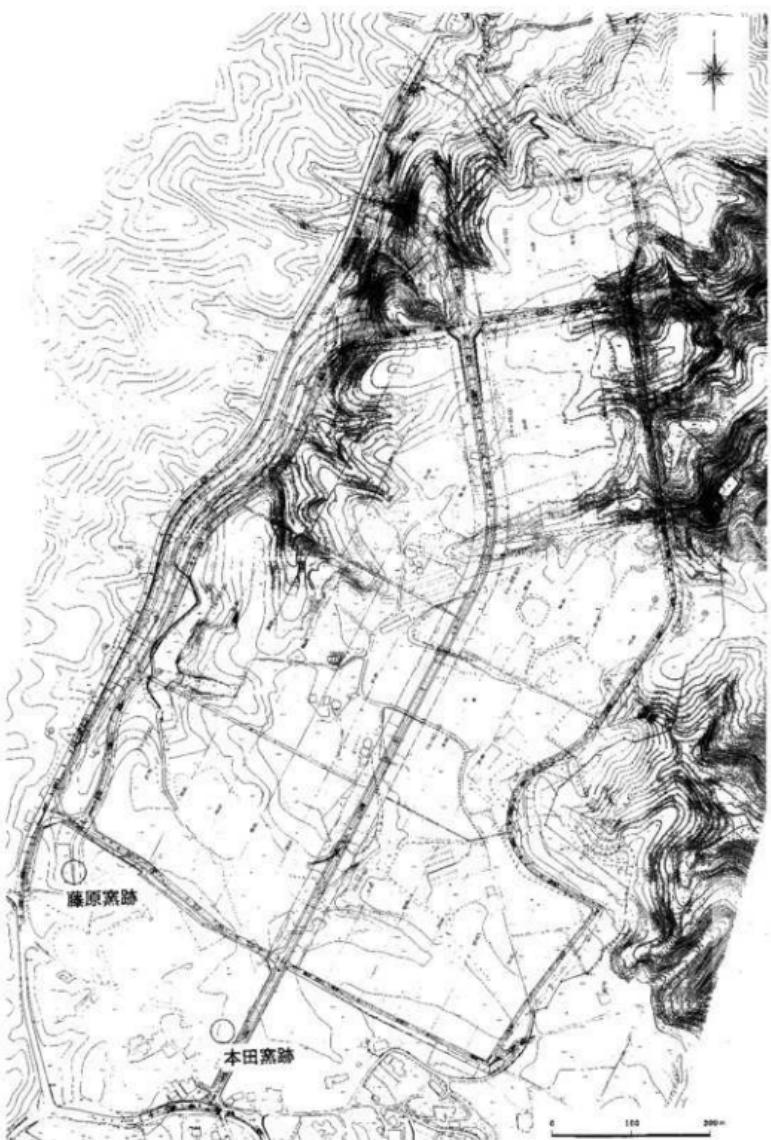
益田市は島根県の西端に位置している。西は山口県と県境を接し、南には中国山地が控え、北は日本海に面している。高津川と益田川の二大河川の下流域に広がる肥沃な益田平野を市域の中心とする面積約300km<sup>2</sup>、人口約5万2千人を抱える県西部における中心都市であり、山陰と山陽を結ぶ交通の要衝として古くから拓けた地域であったが、近年は高速交通網の整備の遅れや産業の停滞等により若干層を中心に人口の流出が続いてきた。

そこで、島根県では平成5年には石見空港を市内市原町に開港し、山陰自動車道浜田－益田間に連結する益田道路、さらにこれと石見空港を結ぶ石見空港道路を一体的に整備することなど、高速交通網の整備に力を注いでいる。一方、雇用の創出による定住促進策の一環として工業団地の造成、分譲を計画し、平成3年度から適地、規模等について調査を進め、石見空港の南約4kmに位置する益田市虫追町羽原に益田拠点工業団地（石見臨空ファクトリーパーク）の造成事業に着手した。この工業団地には、臨空型産業をはじめとして、関西、広島方面の加工組立型等の企業の立地を進めることとしている。開発面積は66.8ha、分譲面積は約45haにおよぶもので、事業は島根県上地開発公社が行なうこととなった。

益田市教育委員会では平成6年度に島根県上地開発公社からの依頼をうけて計画予定地内の遺跡分布調査を実施し、近代のものと推定される瓦窯跡2基を確認した。これは昭和59年度に島根県が実施した「生産遺跡分布調査」で確認されている通称本田窯跡、藤原窯跡である。

この調査結果に基づき、益田市教育委員会では島根県上地開発公社と協議した結果、平成7年度に現地の発掘調査を実施することになった。

なお、今回の調査は造成工事と並行することとなったが、事故もなく順調に現地調査を終えることができた。これは島根県土地開発公社、造成工事業者および地元関係者の協力によるものである。記して謝意を表したい。



第1図 益田拠点工業団地内遺跡位置図

## II. 遺跡の位置と歴史的な環境

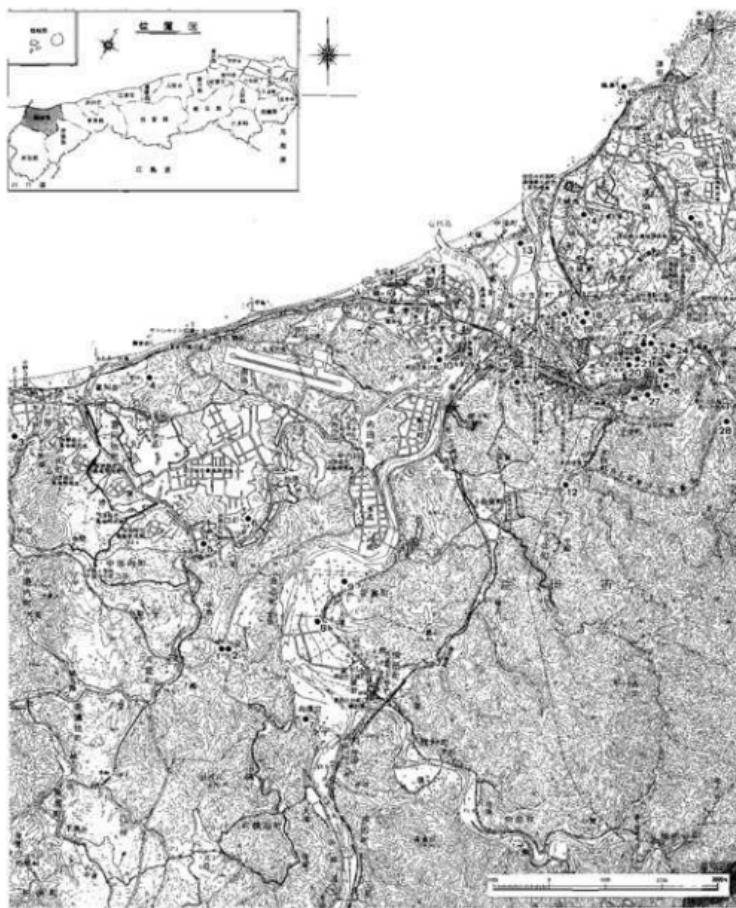
益田市は益田平野をはじめとして、古くから拓けた地域であることを示す多くの遺跡が分布している。

縄文・弥生時代の遺跡もいくつか確認されているが、代表的なものに安富王子台遺跡があり、多くの遺物が出土している。

古代の遺跡は多数におよぶ。古墳は当時の開拓地域の範囲を表すように平野部周辺の丘陵地を中心に総計250余基が確認されていて、益田が右見地方における古墳文化の中心の一つであったと考えられている。その主なものとしては全長が87mの大元1号墳、50mを超える小丸山古墳といった前方後円墳や三角縁神獣鏡が出土した四塚山古墳、かつて約50基以上の小規模古墳で構成されていた鶴ノ鼻古墳群、横穴墓では片山横穴墓群、北長迫横穴墓群などがある。そして益田の古代文化の象徴としては柿本人麿の存在があげられる。出生地は市内の戸田、終焉地は高津と伝えられ、共に人麿を祭神とする柿本神社があって文化産業開発の神として広く信仰されている。

中世にはいると地方豪族の益田氏に関連した遺跡が多くなる。七尾城は益田氏歴代の拠城として築かれた山城で、何回か改修をされて現在の姿になったとされているが、現存する遺構の大部分は毛利氏に敵対した戦国時代末期に改修された際のものと考えられる。平成4年度より実施されている発掘調査によって礎石建物や瓦葺建物があったことが確認されており、中世城郭から近世城郭への移り変わりを示す貴重な事例といえる。また、益田川を隔てて城下の南東約0.7kmの泉光寺境内地を中心とする地点には益田氏の居館跡で東西に大規模な土塁が残る三宅御上居跡がある。その他にも益田氏15代兼亮により益田に招かれた雪舟が作庭したと伝えられる庭園がある医光寺、万福寺や益田氏の保護をうけて発展した染羽天石勝神社や妙義寺など七尾城下にあたる旧益田地区を中心に益田氏に関わりのある史跡・文化財が数多く残っている。

近世にはいると益田氏20代元祥は毛利氏の永代家老として長門国須佐に移った。これに伴って益田市は高津川を境に津和野藩と浜田藩に分かれて明治維新を迎えるに至った。



1. 墓原窯跡
2. 本田窯跡
3. 戸田柿本神社
4. 富同弥燒窯跡
5. 白上古墳
6. 白上燒窯跡
7. 向横田城跡
8. 安富王子台遺跡
9. 羽塔遺跡
10. 高津柿本神社
11. 北長泊構穴群
12. 風原閻門跡
13. 石造十三重塔
14. スクモ彥古墳
15. 粕ノ島古墳群
16. 大元1号墳
17. 今市船着場跡
18. 四塚山古墳
19. 小丸山古墳
20. 三宅御土居跡
21. 万福寺
22. 片山様穴墓群
23. 染羽天石燈神社
24. 観光寺
25. 萩田兼亮の墓
26. 七尾城跡
27. 炒蘭寺
28. 大谷土居跡

第2図 調査対象と周辺の主要遺跡

### III. 羽原地区の歴史について

調査対象が所在する益田市虫追町羽原は、中世においては建久年間(1190~99)頃に本拠を上府(現在の浜田市)から益田莊に移した益田氏の支配下にあった。そして弘安5年(1282)には元寇に際して能登國から移ってきた古見氏の支配を受けるようになった。ところが応仁元年(1467)に京都で起こった応仁・文明の乱に乘じて山口で大内氏の家督争いに端を発する大内道頼の乱が起きると、道頼側についた古見信頼は敵対した益田兼堯、貞兼父子と交戦したが、豊田城、高津城をはじめ市原、川登といった羽原周辺の諸城も相ついで益田方の攻撃により落城し、文明3年(1471)に羽原は再び益田領に属した。応仁・文明の乱が終結して益田氏と古見氏の関係も旧に復したが、羽原は益田氏の支配下のまま近世を迎えることとなった。

近世になると益田氏は毛利家永代家老として知行高12,000石を与えられ長門国須佐に移っていった。このため羽原の属する金地村は高津組20カ村中の一村として近世全般を通じて津和野藩の支配地となつた。

近代になると地方行政組織の統廃合が何回か行なわれるが、明治17年に金地村は白上村に統合された。さらに明治22年には町村制の施行によって、周辺5カ村と合併して中西村になつた。そして中西村は戦後の昭和27年に1町7カ村の合併による益田市市制施行に加わり現在に至つてゐる。

羽原を含む中西地区の主要な産業は農業であるが、その他に特色ある産業としては近世に製紙業、近代には窯業があった。まず、製紙について概略を述べてみたい。石見半紙として著名な製紙業は津和野藩が殖産興業政策の一環として奨励したことにはじまる。津和野藩による製紙は慶長6年(1601)にはじまり、寛文6年(1666)には和紙の販売を藩の直営として重要な財源としていた。各村に対しては紙納数量が割り当てられ、この制度は明治初年まで続いた。羽原では製紙が盛んではなく、生産量の多い他の村と製紙の契約を結んで割り当て分の紙納をしていたようである。製品の主な積出港は長門国の江崎港や安芸国の中日市港であったが、中西地区で生産された紙は高津港より大阪方面を中心に全国各地に出荷された。しかし藩の保護がなくなった近代になってからはしだいに衰退し、昭和にはいると産業としての製紙は姿を消した。

窯業は中西地区におけるかつての主要産業で生活雑器を生産する窯元がいくつ

か存在していたが、なかでも羽原の特色である瓦の生産について概略を述べてみたい。右州瓦の起源は、素焼きの赤瓦の製作が享保年間(1716~36)にはじまったものが最初とみられ、文化年間(1804~18)には釉薬を塗布した赤瓦が生産されている。益田市内では瓦の需要が増加した近代に羽原をはじめ、喜阿弥、戸田、遠田に瓦工場が設立され、本格的な生産がはじまつた。大正年間には、多くの地域で瓦の生産が盛んになり、大正5年に瓦工場経営者が集まって、美濃郡赤瓦同業組合が結成された。大正8年には瓦の販売の一切は組合で取り扱うこととして石見瓦購買販売組合事務所が益田町に設けられている。さらに大正10年に大規模な製造販売を目的として美濃、那賀郡の業者により石見実業株式会社が設立された。なかでも中西村産の瓦は良質な粘土に恵まれて、品質は会社構成業者中随一であった。石見実業株式会社は当地方における瓦生産の指導的役割をつとめ、戦時中の昭和18年に解散した。

羽原における瓦の生産の変遷を記した記録によると、明治10年代に藤原弥太郎、永田惣五郎、古鉄勘蔵といった中西地区出身の人物達により瓦の生産が行なわれたとされている。やがて瓦の生産は羽原の基幹産業として発展し、最盛期には7基の登り窯が操業していた。

羽原で最初に操業をはじめたのは通称日ノ出工場で、前述の古鉄勘蔵が經營していた瓦工場が母体である。その後の経営者の名前をとって中村工場とも呼ばれていた。明治30年代にはさらに数基の窯が新たに開設され、瓦生産が産業として定着してくると、工場間の過当競争により経営の苦しくなった各業者は羽原協同組合を結成して経営の強化を図った。その後、前述の石見瓦購買販売組合に加入している。戦時中は瓦の生産は停止していたが、戦後に復活し一時活況を呈したものの登り窯による前近代的な生産形態は燃料費、人件費の高騰により衰退をはじめた。このため羽原でも業者合併や廃業が行なわれた。その結果前近代的な登り窯は昭和40年代初頭を最後に姿を消し、より近代的なトンネル窯1基が建設された。トンネル窯は重油を燃料とし、日産約7千枚の瓦が生産可能で、年間7~8回操業して1回あたり数千枚の瓦を生産する登り窯より格段に効率的なものになった。しかしながら衰退傾向に歯止めをかけることはできず、昭和50年代の後半に瓦の生産は幕を閉じた。

現在の羽原は戸数39戸の、米作と畑作を中心の農業の盛んな地区である。



1. 鷺原窯（篠武工場） 2. 本田窯（塙工場）  
 3. 中村豊太郎窯（日ノ出工場、現存） 4. 石橋窯（中央工場、消滅）  
 5. 中村六右衛門窯（益田工場、現存） 6. 鷺原民之窯（新屋工場、消滅）  
 7. 梅白窯（北山工場、消滅）

第3図 羽原周辺の窯跡分布図

## IV. 調査の概要

発掘調査は工業団地造成地内における遺構の確認とその記録を目的として実施した。

本田窯跡は工業団地造成地南端に建設が計画されている進入路付近に位置する瓦生産を目的とした近代の登り窯で、石見地方で丸物と呼ばれている粗陶器類は小規模な生産は行なわれたようであるが、商品として大量生産は行なわれていなかっただようである。調査は不良品をまとめて投棄した物原やその他窯業関連遺構の存在が考えられる窯跡東部の平坦地の面積500m<sup>2</sup>に調査区を設定し、平成7年6月14日から9月16日の期間で実施した。

まず、周辺の地形測量を実施して、その後に確認された2つの物原にはそれぞれ東西南北に軸線を設定し、断ち割りをして堆積状況を調べた。また、物原の北と東の平坦地には窯業関連遺構の存在が推定できたため、数箇所のトレンチを設定して遺構の確認につとめた。

一方、藤原窯跡は造成地南西端の雑木林内に位置している登り窯で本田窯跡と同じく商品としての丸物は生産されなかったようである。窯跡本体のうち造成地に含まれる部分ならびに物原や他の窯業関連遺構の存在が推定される窯跡周辺部の面積約420m<sup>2</sup>を調査対象地とし、平成7年9月25日から12月11日の期間で調査を実施した。

周辺の地形測量を実施した後に、窯跡と推定される箇所の崩壊して堆積している窯壁の構成部材や土砂の除去を行ない窯跡の確認につとめた。確認した窯跡を実測した後に遺物や上砂の堆積状況を観察した。その他に2箇所確認された物原の断ち割りを実施した。

### 1. 本田窯跡

#### (1) 沿革と現況

本田窯跡は大正後期に個人経営の瓦牛生産用の登り窯として開設されたもので、羽原においては最も遅れて開設されている。そして昭和元年には大正10年設立の

石見実業株式会社に経営権を移し、経営者は会社の株主となっている。これにより零細経営から脱却し、資本の集中により経営も安定した。しかし昭和18年には戦時統制のため会社は解散することとなった。戦後になっても通称原工場と呼ばれ生産を続けていたが、その後経営者が変わることで通称も本田工場となり、しばらく操業した後廃業し、現在に至っている。

登り窯は工業団地南端に計画されている進入路付近の丘陵の雑木林中に位置している。丘陵の南側斜面を利用して築かれている。表面観察の結果、いくつかの焼成室を持つ連房式登り窯であることが判明した。現在は天井が崩壊し、基底部は土に埋もれ、崩壊した窯壁部材が多量に堆積している。東側は緩やかな谷状になっていて谷底には平坦面が広がり、さらに東はふたたび丘陵となっている。進入路予定地になっている谷底の平坦面には踏査により確認されている2つの物原があり、さらにその他の窯業関連施設の存在を考えられるため、登り窯を除いた周辺部に調査区を設定し、物原を中心に調査を行なった。このため窯跡は現況のまま残ることになったが、今後開発が計画された場合は発掘調査を実施する必要があると判断された。

## (2) 発掘調査

調査は2つの物原の南北を通る軸線を基準線とし、この基準線に沿って物原を断ち割って断面の確認を行なった。またその他の窯業関連施設の有無を調べるために、任意でトレーニチを3箇所設定して遺構の確認につとめた。

物原は発掘前の踏査により窯跡南東の谷底の平坦面の約66m<sup>2</sup>に認められた。これは2つの高まりから成る物原で南側のものを物原1、北側のものを物原2として調査区4を設定した。物原の表面には瓦や窯道具が多量に散乱していた他に、ごく最近のものとみられる陶磁器やガラス製の食器も散乱していた。これらの陶磁器やガラス製の食器は窯の廃業後に投棄されたものと考えられ、遺跡とは直接関係ないものと思われる。

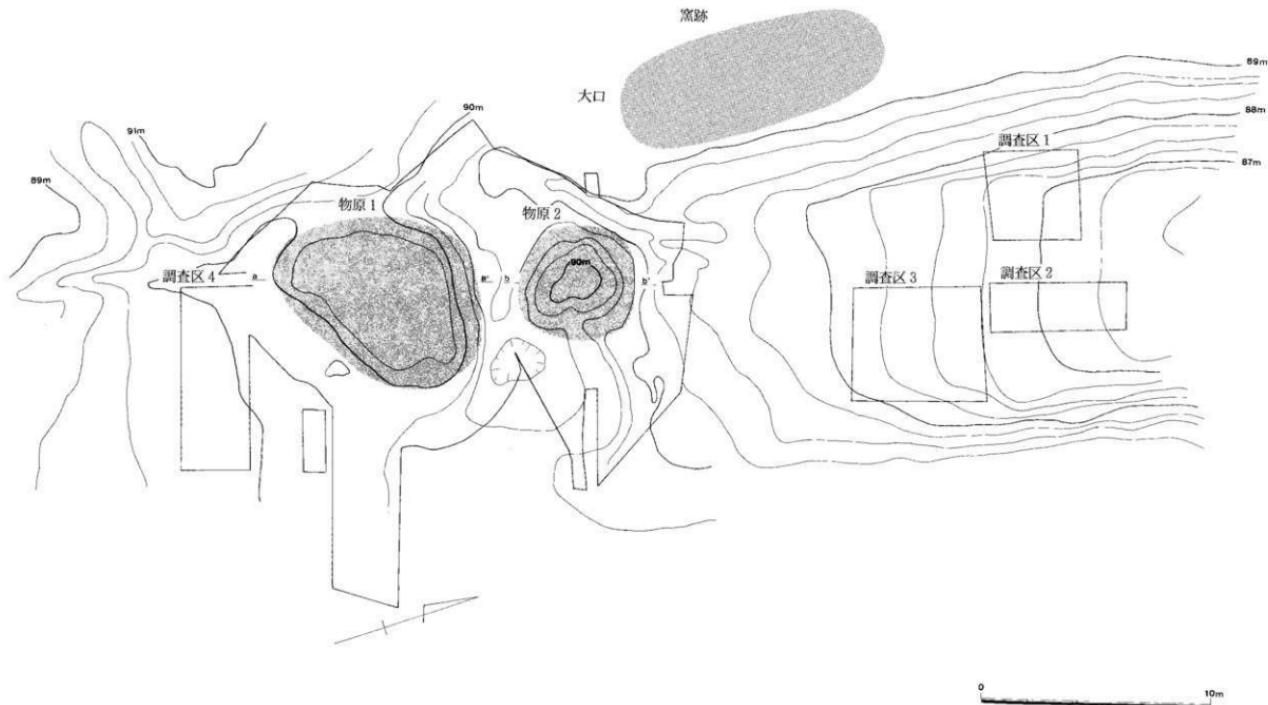
物原の堆積物は瓦と窯道具の他にトンバリ（窯築材料の大型レンガで窯室と窯室の間に使用する）アゼ（窯を築く時に使用する大型レンガ）と呼ばれる窯の部材に使用されたレンガと窯より排出された灰、炭がほとんどであった。調査では

物原1、2を南北に通る軸線に沿って十層の堆積状況を観察しながら掘り下げを行なった。

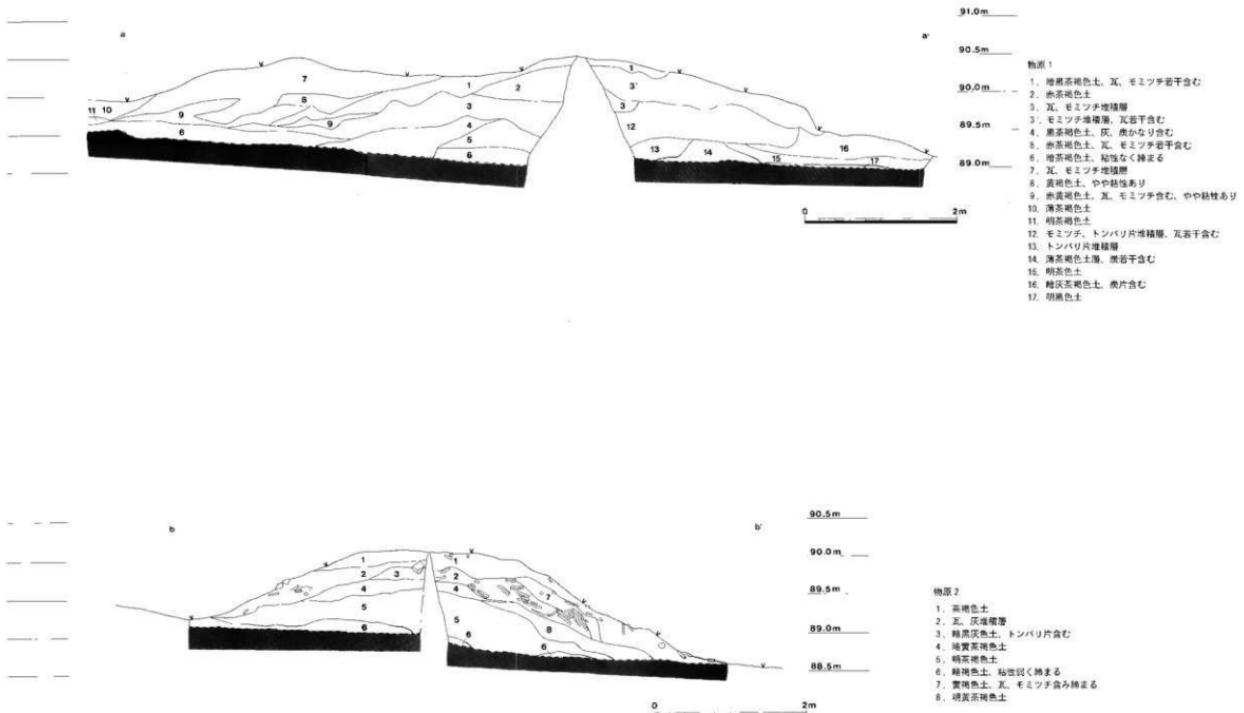
物原1は約46m<sup>2</sup>で南に長く延び、北端は物原2に連続している。層序は同じ物原にもかかわらず南半部と北半部ではかなり異なっている。また、南半部の中でもさらに層序の違いが認められる。南端にいくにしたがって第1層の上に第7層が堆積している。第7層は瓦やモミツチ(窯詰めの際に瓦の熔着を防ぐ窯道具)の堆積層で土はほとんど含まれない。第7層の下に堆積する第8、9層の土質は遺物の包含が少なく、黄赤褐色系でトンバリ、アゼといった窯の部材の細片が堆積したものと推定された。一方、第4、6層の土質は黒茶褐色系で窯より排出された灰、炭の堆積したものと思われ、明らかな相違が認められる。北半部の層序は南半部とは異なった様相をみせている。第3層より瓦の包含が少ない第3'層の下に第12、13層といった窯道具の堆積層が認められ、さらに遺物をほとんど含まず炭片を含む第14、16層が堆積し、全体に黒く汚れている印象を受ける。

物原2は約20m<sup>2</sup>と物原1より小規模で、物原1の第3、7層のような瓦や窯道具がほとんどを占める堆積層は認められず、遺物量も相対的に少ない。また、層序は南半部、北半部に大きな相違はみられず、整然としている。さらに層序は第4層を境に上下2層に大別できる。上層は遺物を多く含み炭、灰で汚れた層で下層は遺物が少ない明黄褐色系の土層である。第1層は表上で投棄された瓦や窯道具が表面に散乱する以外に遺物は少ない。第2層は灰堆積層で瓦、窯道具を多く含む。第3層も灰混じりの層であるがトンバリを多く含んでいる。第4層も灰を含むがその割合は第3層より少ない。また、瓦、モミツチの細片が少量含まれていて程度で遺物の包含量も少ない。第7層は灰をほとんど含まず、瓦、モミツチの包含量も第2層より少なくなっている。第5層は下層の大部分を占める層で遺物をほとんど含んでいない。第6層は第5層と土質が大きく異なり、締まりも強く旧表土と思われる。

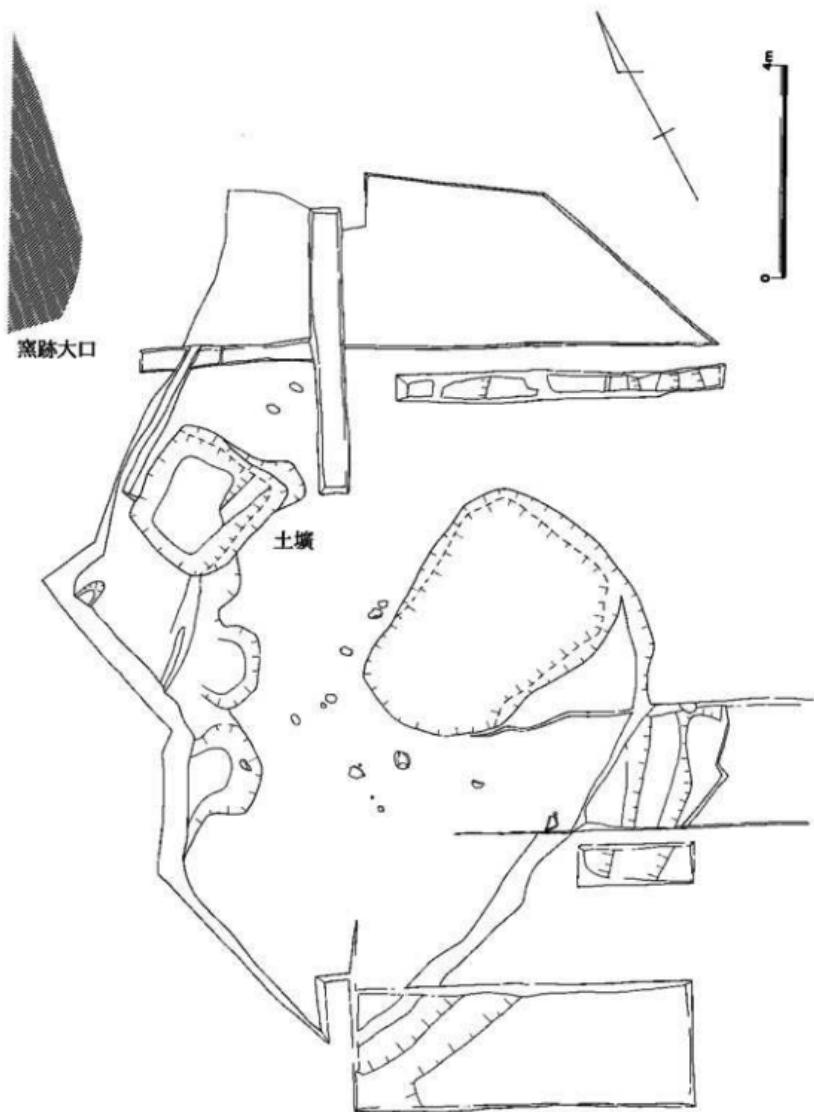
調査区4は範囲を物原周辺で拡張して調査を行なった。調査区北西端には2.4×2.0mで深さ約1.2mを測る水滻槽と思われる方形の土壙が確認された。土壙の東南部にはスロープ状の遺構が認められた他、物原2の北西側を通過して谷の平坦面に続く排水溝と思われる遺構も確認された。内部には瓦片の他に暗灰色粘質土が堆積している。また、東南端からは直徑5~15cmの川原石の石列と長さ約30



第4図 本田窯跡調査前地形測量図



第5図 本田窯跡物原1・2断面図



第6図 調査区4 地形測量図

cmの杭が1本出土した。川原石の用途は不明だが、杭はアゼ杭と考えられ、水田跡の存在が推定される。

物原の北の平坦面については3箇所のトレンチを設定して調査を実施した。調査区2、3からは遺構、遺物ともに確認するには至らなかったが、調査区1からは調査区4の北西端で確認された排水溝と思われる遺構が連続していることが確認された。これまでの調査によって本田窯跡関連の遺構は物原周辺以外では調査区1で確認されたのみであり、調査対象地内では建物遺構が存在しないと判断された。ただし他の調査事例では窯に隣接して作業場が作られていることから、登り窯の南西から西側の平坦面に関連する遺構が存在する可能性もある。

### (3) 本田窯跡の遺物について

本田窯跡では物原を中心に大量の遺物が出土したが、その内で最も多のが瓦と窯道具である。その他にもガラス製品や陶磁器などが表採されたが、窯の廃業後に投棄されたもので窯の操業に伴うものではない。また、壺類を中心とした粗陶器は羽原では商品として生産された形跡は認められないが、自家用として小規模な生産が行われたことが推定され、窯の操業に伴うものの可能性がある。出土した瓦はすべて釉薬瓦で、色調は焼成条件による個体差が著しいものの、暗茶褐色から明茶褐色を呈する赤瓦で、いわゆる石州瓦と呼ばれるものである。施釉された瓦の表面は個体差があるものの、概ね光沢を帯びる。施釉範囲は棟瓦の場合、瓦尻を除く上面と両側辺および頭部で凸面には掛からない。

出土した瓦は棟瓦類が中心であったが、軒瓦類、丸瓦類、棟積瓦類も出土している。以下に出土瓦について述べてみたい。

#### 軒 棟 瓦

屋根の軒の部分に葺かれる瓦で、通称を「カラクサ」(唐草)という。棟部前面に小丸の付く軒棟瓦は出土しなかった。瓦当には中心飾りから茎や子葉が外方に向かって伸びる均整唐草文が施されている。文様は乾燥、焼成前に瓦当に版木を押しつけることによって施されるが、釉薬の掛けりや版木の摩耗等により、個体によって再現性は異なる。唐草文のつくものは、軒棟瓦の外に軒袖瓦、軒隅瓦が

ある。

第7図-1は瓦尻と棟の一部を欠く。瓦当には中心飾りから上下に茎葉が外反し、その外には端部が肥大する2対の子葉があるデザインの均整唐草文がある。棟側寄りの子葉の横には「羽原」と銘が入れられている。文様の再現性は良好で肉厚で立体感に富む。幅31.9cmを測る。釉薬はやや明るい茶褐色を呈し、光沢はやや弱い。上面に3つ、瓦当正面に2つ、凸面には2つの窯道具熔着痕が認められる。物原1出土。

7-2は瓦当周辺のみが残る。瓦当文様は大形の中心飾りから4対の茎葉が両端に伸びる均整唐草文であるが、銘は入っていない。再現性はやや鮮明さに欠けている。釉薬は暗茶褐色で黒いまだら状の変色が入る。物原1出土。

7-3は棟部が欠けている。瓦当文様は中心飾りの上下に茎葉が外反するデザインは7-1と同様だが、端部の肥大する子葉は1対のみで、さらにその外に茎葉が1対付いている。棟側寄りの茎葉の下には「会」の銘が入っている。この銘は石見窯業株式会社との関連が考えられるが現時点では不明である。再現性は良好で彫りが深く立体感がある。長さ27.0cmを測る。釉薬はやや明るい茶褐色。上面瓦当寄りと凸面にそれぞれ熔着痕が残る。釘穴は2つ開く。物原1出土。

7-4は頭周辺部のみが残る。瓦当文様は7-2と同様のデザインで、再現性がやや鮮明さに欠ける点も共通している。茶褐色の釉薬が掛かる。瓦当の上面にかなり大きな熔着痕が認められる。物原1出土。

7-5は頭を一部欠く。瓦当の文様は中心飾りより外反する茎葉のデザインは7-3と同様であるが、「八一」(ヤマイチか)と銘が入っている。長さ27.9cm幅32.4cmを測る。釉薬はやや明るい茶褐色で光沢はやや弱い。上面に3つの熔着痕がある。釘穴は2つ穿孔されている。物原2出土。

7-6は棟を一部欠く。瓦当のデザインは7-2と同様である。長さ26.9cm幅31.3cmを測る。上面に窯道具熔着痕がある。釘穴は2つ開く。瓦尻の方にかなりの焼歪みがみられる。物原1出土。

### 隅 瓦

屋根面が交わる部分に葺かれる瓦で軒棟瓦や棟瓦を斜めに切り落して製作される。

8-1は隅切して使用する瓦の残りの部分で、切断面には上面側から半分まで

分割線が入り、凸面側には焼成後の分割破面が認められる。釉薬は切断箇所を越えて一部掛かっているが、他には上面、凸面ともに掛かっていない。切断面にも掛からない。物原1山上。

### 熨斗瓦

棟積みに使用される瓦で、数段に積み重ねられる。その高低は建物の格を決める目安ともなっている。

8-2は熨斗瓦の内でも割熨斗と呼ばれるもので、凹面中央に分割線が入り使用にあたって分割されるものである。当方では分割使用しない通常の熨斗瓦を「オオノシ」(大熨斗)と呼ぶのに対して「コノシ」(小熨斗)とも呼ばれる。分割使用するため、中央は裸胎で端部に茶褐色の釉薬が掛かり、2箇所の窯道具熔着痕がある。釘穴は分割線を挟んで2つ開く。物原1山上。

### 軒丸瓦

軒丸瓦は棟瓦葺の場合には棟の両端や下り棟の先端に使用される瓦で、瓦当文様として巴文が施されている。

8-3は瓦下面に顎が付く軒丸瓦で筒部後半が欠ける。この瓦は下り棟の先端に使用するもので顎は隅木を保護する役割を持つ。当方では「クツ」(靴)と呼称されている。瓦当文様は以下に記述する軒丸瓦と共通の連珠三巴文で巴も玉も肉厚でしっかりしている。体部幅は15.4cmで瓦当径は13.9cmを測る。釉薬はやや明るい茶褐色で筒部内面には掛からない。筒部外面には窯道具のものと思われる熔着痕が認められる。物原1出土。

8-4は筒部後半を欠くが幅14.9cm瓦当径14.3cmを測る。この瓦は棟の両端に使用され「トモエ」(巴)と呼ばれる。瓦当文様は再現性も良好ではっきりしている。釉薬は筒部内面には掛からず、暗茶褐色で光沢はやや弱い。内面には離れ砂と思われる砂粒が付着する。外面3箇所に熔着痕が残る。物原1出土。

8-5は筒部を欠く軒丸瓦で瓦当径は14.4cmを測る。文様は8-3と同様で彫りが深くひじょうに立体感がある。釉薬は暗茶褐色で光沢は弱い。物原1出土。

8-6も筒部を欠く軒丸瓦で瓦当径は14.5cmを測る。文様も上記の軒丸瓦と共通で再現性も良好である。釉薬は茶褐色で光沢はやや弱い。物原1出土。

### 雁振瓦

数段に積み重ねられた熨斗瓦の上、棟の頂部に葺く瓦で横断面が緩やかな曲線

を持つものと、稜線があり山形を呈するものがあり、雨の流入を防ぐための棟が付く。棟の中央に葺く雁振瓦は棟が両辺にあり、「メイタ」(目板)と呼んでいる。

9-1は瓦尻が一部欠ける。釘穴はほぼ中央に1つ穿孔されている。釉薬は暗赤紫色で光沢はなく、焼縮みがみられる。凹面は裸胎で離れ砂と思われる砂粒が付着する。長さ14.4cm幅13.8cmを測る。物原2出土。

### 鳥伏間

9-2は鳥伏間で棟止板に付いて棟の両端に葺かれる瓦である。鳥体の先端の瓦当には三巴文が施されている。文様は連珠三巴文であるが、巴の回転が反時計回転で軒丸瓦のそれとは異なっている。鳥体の付いている雁振の破断面には棟止板との接合強化のための条線が認められる。釉薬は暗灰色で焼縮みがある。物原1出土。

### 棟止瓦

棟の両端に軒丸瓦、鳥伏間とともに葺かれる瓦で当地方での通称は「タイコ」(太鼓)という。

9-3は棟止瓦の板の部分で裏面には断面が曲線を呈する雁振が接合していた破断面があり、接合強化のための条線が観察できる。正面には三巴が3つ施され、下端に軒丸瓦と組み合わせるための空間がある。釉薬は黒色に近い暗茶褐色で焼縮みがある。

9-4も棟止板で形状は、9-3と類似するが、三巴文の他に装飾線が外周に施されている。裏面も9-3と同様で雁振との破断面があり、接合強化のための条線も認められる。釉薬は茶褐色で焼成は9-3より良好である。正面に2つの大きなモミッチ熔着痕がのこる。物原1出土。

### 窯道具

白地(成形の終った焼成前の瓦)を窯詰めする際に、瓦を安定させて熔着を防ぐために使用される。

9-5はモミッチといわれる粘土でつくられた窯道具で、多量に山土している。瓦を立て並べて窯詰めする際に瓦の上下にそれぞれ2列づつ敷き、窯底や瓦同士の熔着を防ぐものである。長さ27.5cmを測る。ハセのものと思われる熔着痕と瓦による圧迫痕が認められる。物原1出土。

9-6もモミッチであるが、棟止瓦などに使用する。そのためにひねりを加え

て瓦との接触面を最小限にとどめる工夫がみられる。長さ17.2cmを測る。物原1出土。

9-7~10はハセと呼ばれる窯道具で出土量も多い。瓦を窯詰めする際には瓦の熔着を防ぐため、瓦同士の頭2箇所に挟んで使用する。モミツチは焼成させることなく使用し、原則として使い捨てである。一方ハセは手作業で形を整えた後に素焼きする。そして頭が欠落したり、瓦の釉薬が付着して使用に適さなくなるまで何回か繰り返し使われる。物原1出土。

#### その他の遺物

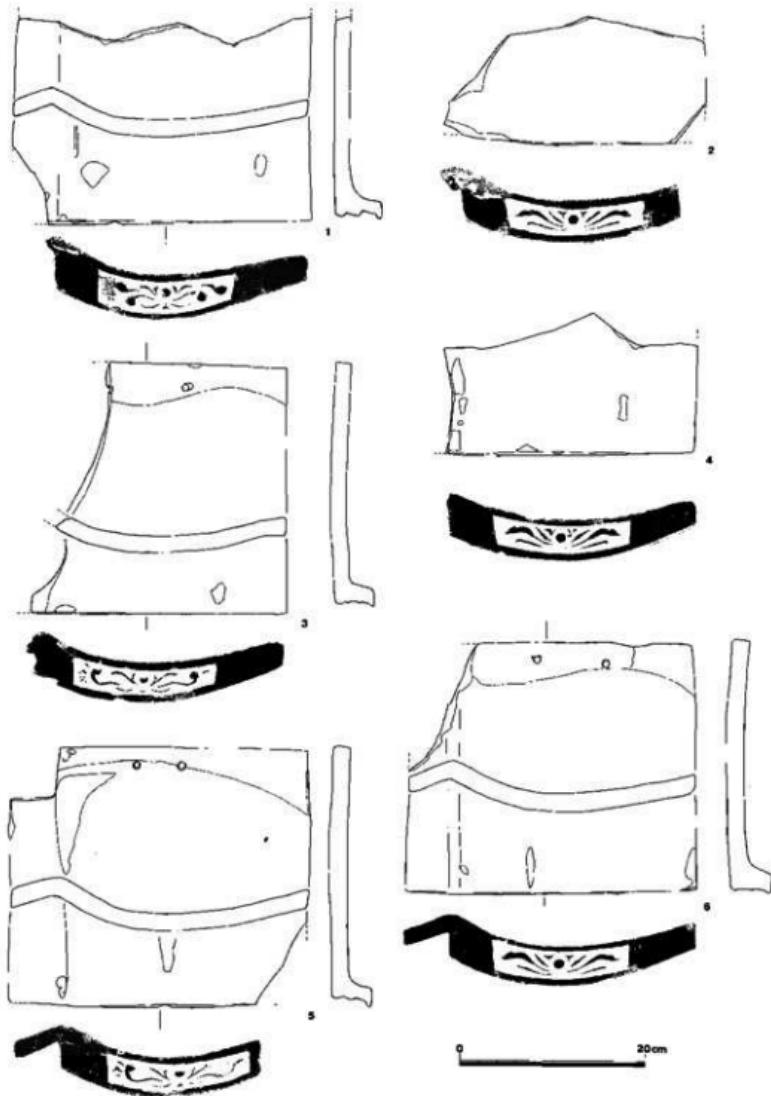
10-1は小鉢で口縁部を欠く。全体は薄白茶色を呈するが、其底部は裸胎である。物原1表採。

10-2は磁器の小皿で口縁部が波状に縁取りされている。全体は白色であるが内面には4色を使った絵付けが施されている。物原1表採。

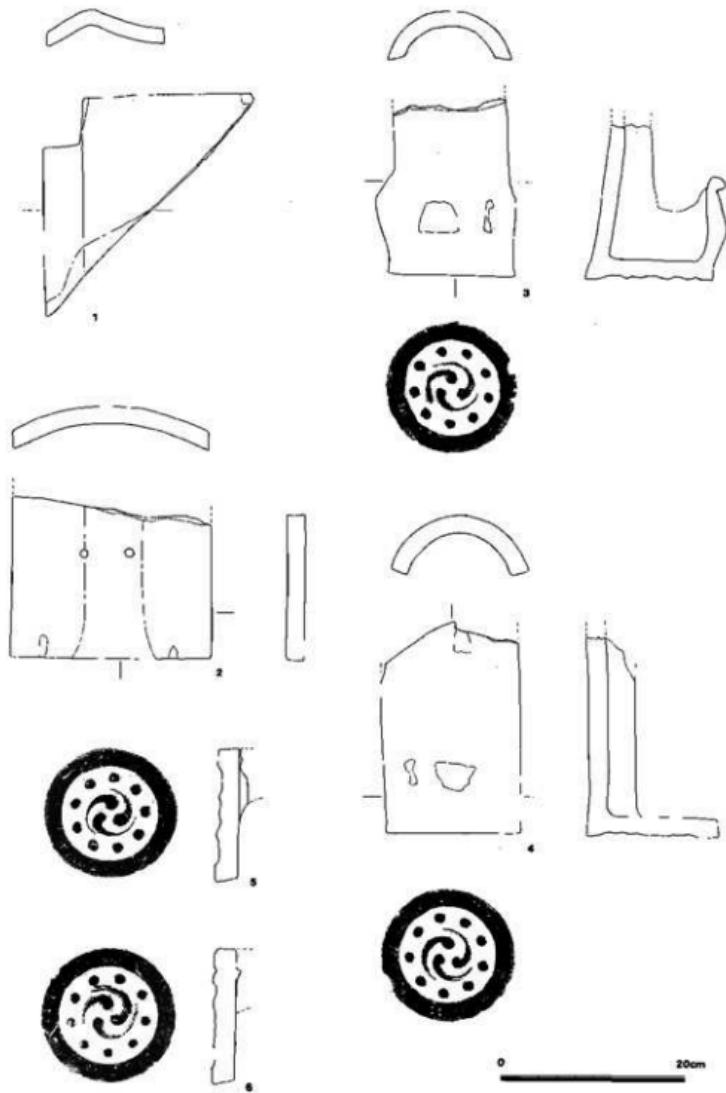
10-3は摺鉢で底部を欠く。全体には暗茶褐色の釉が掛かるが、基底部には掛からない。物原1出土。

10-4は素焼きの製品で使用目的は不明である。表には桜花の模様が施され裏面には「トリイ」と線刻されている。物原1出土。

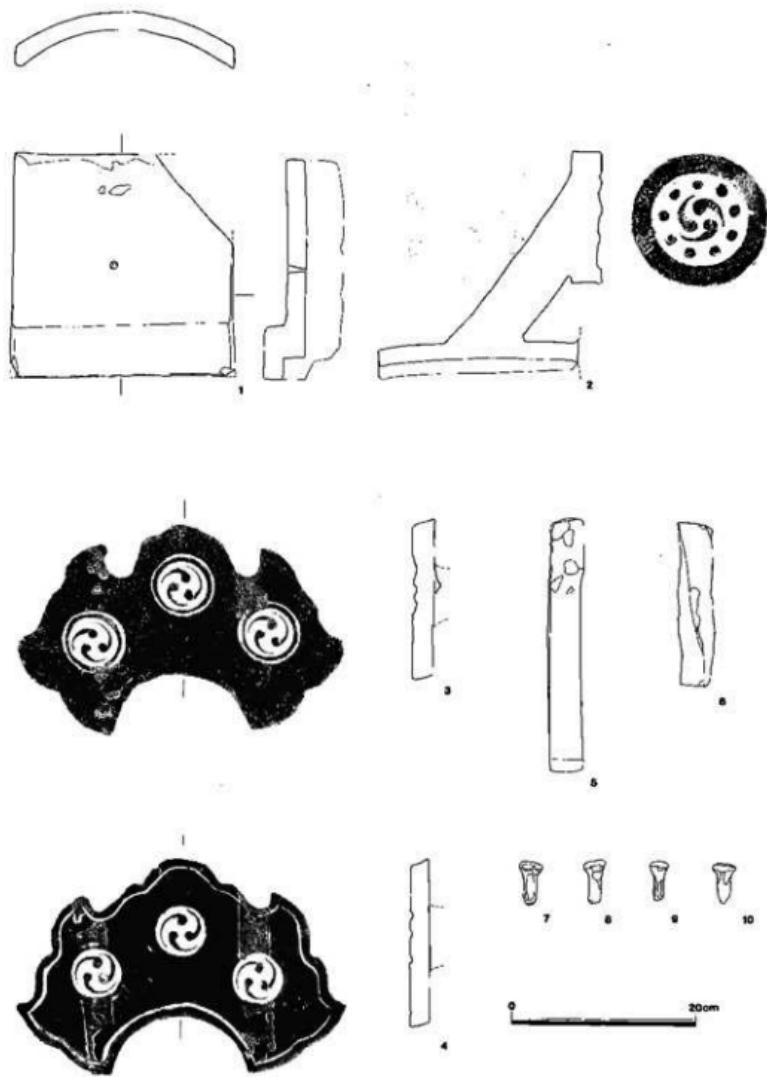
10-5は甕で基底部を欠いている。全体に暗茶褐色の釉が掛かる。文様は認められない。物原1出土。



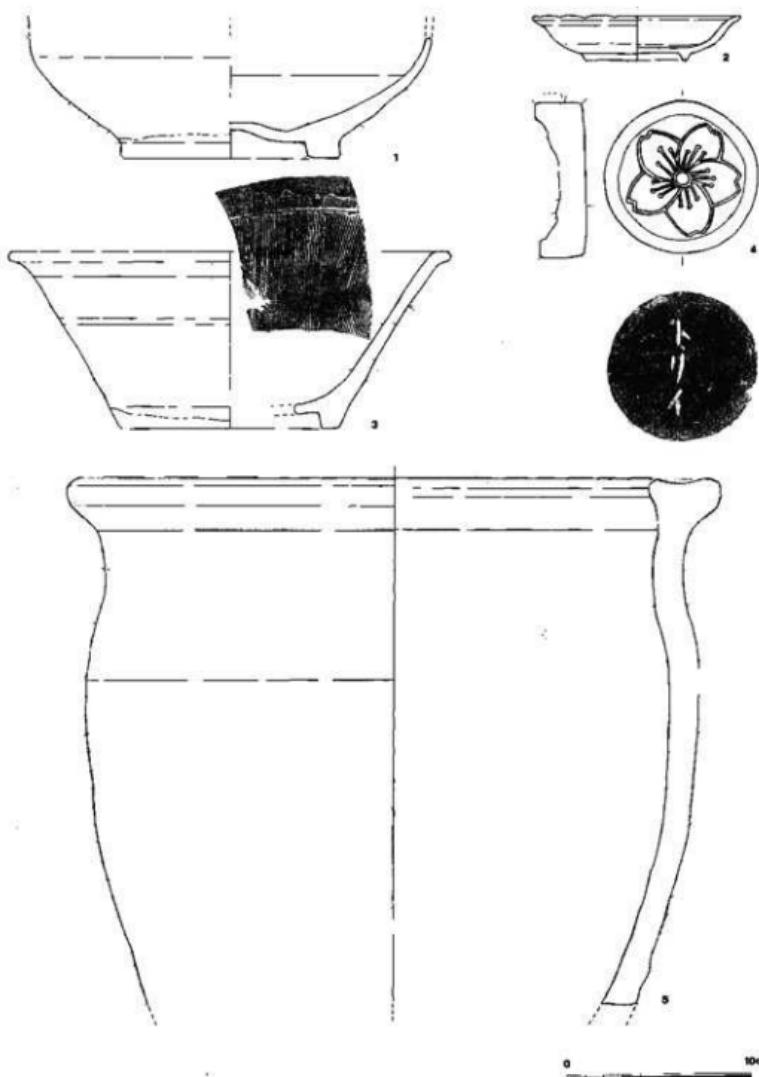
第7図 本田塚跡出土遺物実測図1



第8図 本田窯跡出土遺物実測図2



第9図 本田窯跡出土遺物実測図3



第10図 本田塚跡出土遺物実測図 4

## 2. 藤原窯跡

### (1) 沿革と現況

藤原窯跡の地元の通称は領武工場で、明治30年代に開設された瓦生産用の登り窯である。しかし経営規模が小さいため経営が安定せず、経営者の移り変わりが数回あったがいずれも安定した経営状態とまではいかなかつたようである。これは他の工場でもみられる傾向であり、そのため羽原の各経営者は協同して羽原協同組合を結成し、経営基盤の強化を図っている。しかし羽原の7業者のみでは意図した経営基盤の強化は十分には果たされず、大正5年に美濃郡赤瓦協同組合が結成されると組合に加入し、ようやく安定した経営が実現したようである。窯の廃業時期については記録がみつからず、地元での聞き取り調査でも記憶している人物がいないことから、本田窯跡のように戦後も操業していたとは考えにくく、昭和18年の石見実業株式会社の解散時かそれ以前には廃業していたと推定される。

藤原窯跡の所在地は工業団地造成地の南西端の斜面で、窯跡は1基あり、窯跡をはさむように南北にそれぞれ物原が存在し、北西の斜面頂部には作業場跡の存在する可能性のある平坦面がある。その平坦面の南側には民家があり、土地の造成のために窯最上部付近は削り取られて断面を観察できる。さらに斜面のふもとには近年まで耕作されていた水田跡がある。

工業団地の造成工事に伴い窯跡の大部分と物原の位置する斜面が埋め立てられることから、埋没する窯跡と物原について発掘調査を実施することとし、窯跡の一部と斜面頂部の平坦面は現況のまま残すこととなった。

### (2) 発掘調査

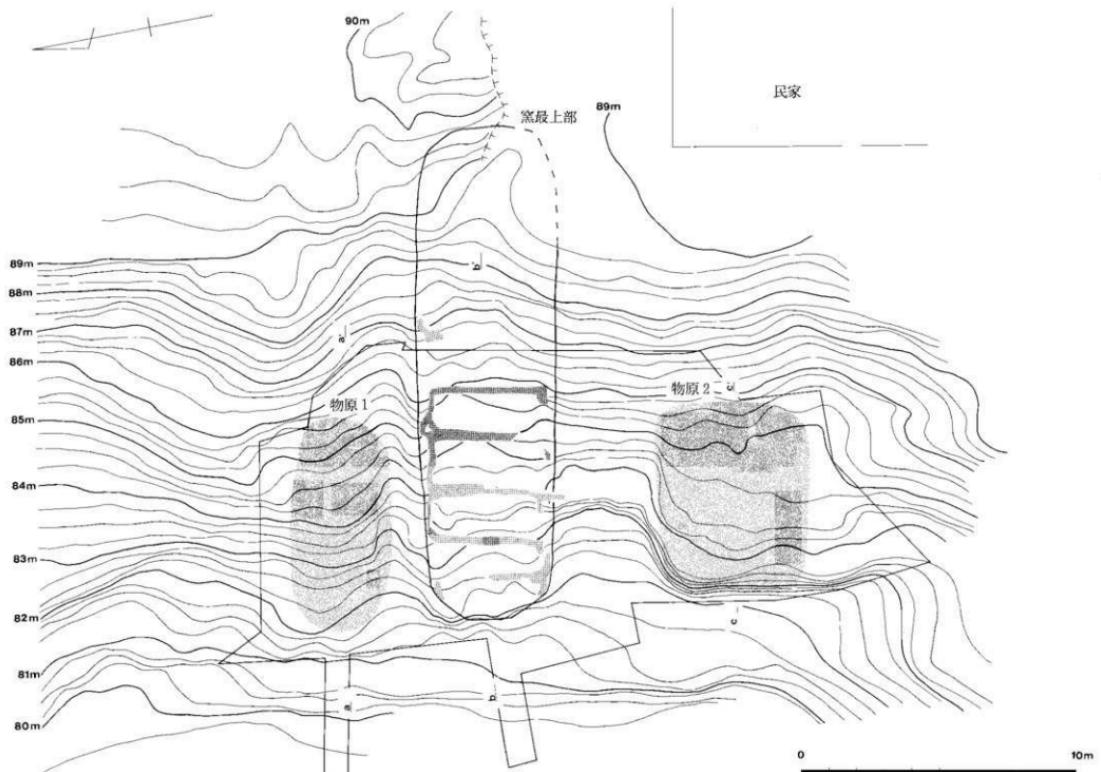
まず、斜面に堆積しているトンバリや土砂等を除去して窯の残存状況を観察した。その結果、全長約17.5m（水平距離）、推定で焼成室を8房持つ連房式登り窯で、各房の南側には階段状のテラスが付設されていることが判明した。調査では登り窯の最下段の焼き口から5房までの10.2mを検出した。窯跡北の斜面には窯道具が散乱し、南の斜面には丸物と瓦の散乱、堆積がみられ、いずれも物原と判断した。

また、窯の北側外壁と物原1の間に沿って人工的に掘削された排水溝と思われる遺構がみられ、窯を湿気から守る配慮がうかがえる。

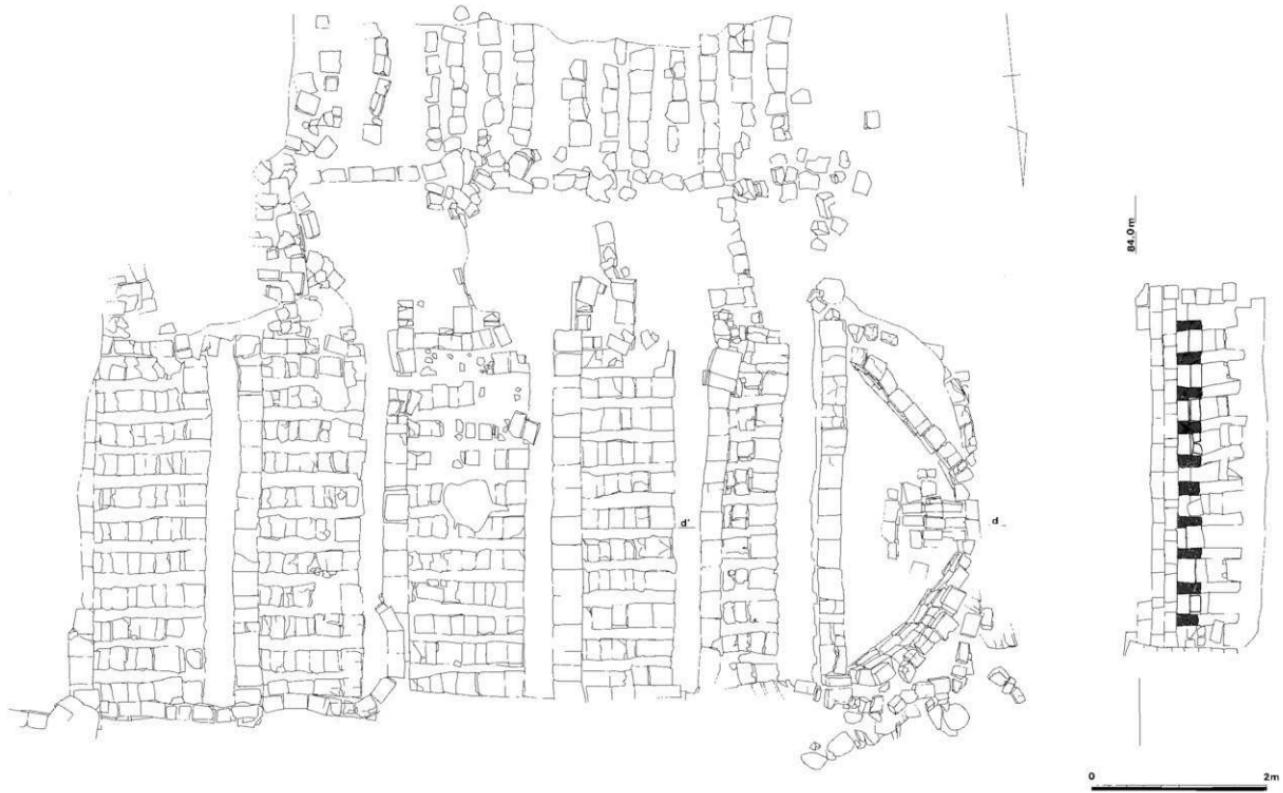
窯跡の推定される主軸に任意の基準線を設定、物原にもそれぞれ基準線を設定して断面観察を行なった。窯跡は基底部に近い窯壁と隔壁、各房の床面が遺存していたが、天井は崩壊して残っていなかった。最下段には人口と呼ばれる燃焼室があり、これにいくつかの焼成室が続いている。人口は平面逆三角形を呈し、奥行1.6mを測る。前面にはトンパリで組み立てられた幅0.4mを測る焚き口が付く。焚き口は2重構造になっていてロストルと呼ばれている。2重構造になっているのは灰を下に落して窯外に排出しやすくするためである。内壁は規則的なトンパリ積みで外壁はトンパリを粘質土で覆っている。房の構造は共通で、階段状に積み上げられたトンパリの最下段と隔壁の間には火床と呼ばれる幅約0.4mの溝状燃焼部分がある。房間にある各壁の下部には火格子穴が開く。階段状のトンパリは各房ともに11列あり、列間にある溝は隔壁の火格子穴に対応していて、大口の熱がここから各房に伝わっていく仕組みになっている。瓦はこの列間を跨いで窯詰めするようになっている。第1房は内壁幅3.8m奥行1.1mを測る。第2房からは各房ともほぼ共通した寸法で内壁幅4.2m奥行1.4mを測る。各房の南側にはそれぞれ焚き口とテラス、さらに階段が付設されている。テラスは窯外壁と同じ粘質土でトンパリにより縁取りされている。南に隣接する階段もトンパリを利用して構築されている。

窯跡の堆積状況は設定した基準線に沿って掘り下げを実施して断面を観察した。堆積物はトンパリが最も多く大口付近には灰の堆積層がみられる。窯跡の堆積層は2層に分けられる。1層は表上でトンパリ、モミツチを含む腐食土層である。2層はトンパリを多く含む層で風化したトンパリの細片により暗赤茶褐色を呈する。しかし、大口付近は窯跡部分と上層がかなり異なり、遺物にトンパリがほとんどみられず、窯より排出された灰、炭のために全体的に黒く汚れている。3層は大口附近の表土で灰を多く含み汚れる。5層は灰、炭の堆積層でトンパリを含まず、モミツチ、瓦が多い。なお、窯跡での瓦の出上はごく少量で、このことから窯は生産終了後に廃業されたものと思われる。

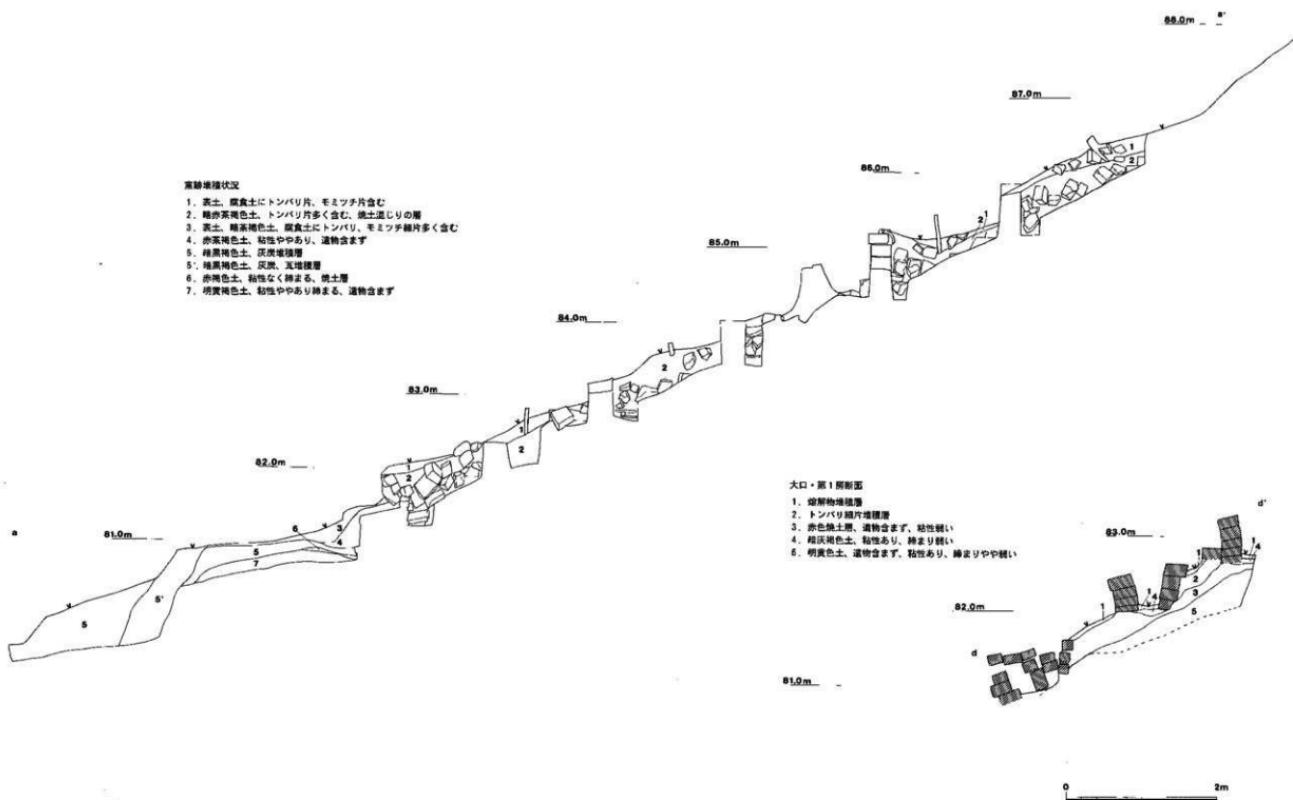
窯跡北側の物原1についても上層観察をしつつ掘り下げを行なった。物原の遺物の堆積は本田窯跡と比較してかなり少量で瓦の種類も少ない。物原1は地表面



第11図 藤原窯跡調査前地形測量図



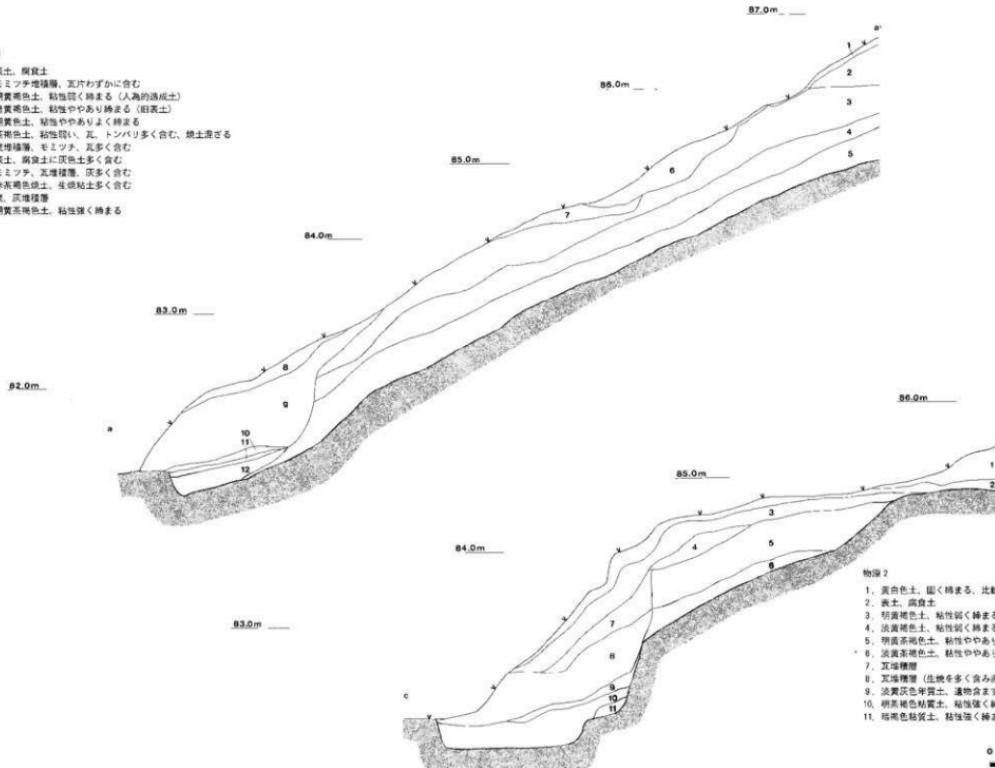
第12図 藤原糸跡実測図および第2房立面図



第13図 藤原窯跡堆積状況および大口、第1房断面図

物原 1

1. 黄土、腐食土
2. モリツア埋立層、瓦片わずかに含む
3. 明黄褐色土、粘性弱く神まる（人為的造底土）
4. 明黄褐色土、粘性弱やあり神まる（旧表土）
5. 明黄褐色土、粘性弱ややありよく神まる
6. 黄褐色土、粘性弱い、瓦、トンボリ多く含む、地土混ざる
7. 底堆積層、モリツア、瓦多く含む
8. 黄土、廻立土に灰色土多く含む
9. モリツア、瓦堆積層、瓦多く含む
10. 香葉赤褐色土、生糞粘土多く含む
11. 灰、瓦堆積層
12. 明黄赤褐色土、粘性強く神まる



第14図 藤原窯跡物原 1・2 断面図

- 物原 2
1. 黄白色土、固く神まる、比較的無近年の堆立土
  2. 黄土、腐食土
  3. 明黄褐色土、粘性弱く神まる（人為的造底土）
  4. 明黄褐色土、粘性弱く神まる、瓦、トンボリ、灰多含み汚れる
  5. 明黄赤褐色土、粘性ややあり神まる
  6. 明黄赤褐色土、粘性ややあり神まる
  7. 瓦堆積層
  8. 黄褐色土（生糞強多く含み赤がかる）
  9. 沈黄赤褐色土質土、植物含み少なめ
  10. 明黄赤褐色土質土、粘性強く神まる、汚れない
  11. 茶褐色粘土質土、粘性強く神まる、汚れる

にモミツチ、ハセが散乱していた箇所で表土層の下には灰混じりで多量のモミツチと少量の棟瓦堆積層がみられる箇所もあったが、全体的には遺物の堆積は少ない。

窯跡南側の階段に隣接した箇所にも丸物や瓦の散乱する物原2が確認された。羽原では丸物が販売を目的として大量生産されていないため藤原窯跡に直接関連のあるものかは不明である。物原2の遺物の堆積も本田窯跡の物原に比較するとかなり小規模である。出土遺物は大部分が棟瓦、軒棟瓦で棟積瓦や役物の出土はごく少量である。表面観察では棟瓦類が物原表面に規則的に積み上げられていたが、断面の観察の結果、積み上げられていたのは表面のみであり、棟瓦とモミツチを多量に含んだ暗茶褐色土の層であったことが判明した。この箇所はかなりの急斜面であり、物原の下にアゼ道が通じていることから、斜面の崩壊防止的目的として積み重ねられた可能性も考えられる。

### (3) 藤原窯跡の遺物について

藤原窯跡では遺物の大半が窯跡の北と南にある物原1、2から多量に出土している。窯跡からの遺物の出土は少ないが物原1からは主として窯道具類が、物原2は丸物が表採された他、瓦と窯道具類が出土している。

#### 軒 棟 瓦

屋根の軒の部分に葺かれる瓦で、瓦当には均整唐草文が施されている。小丸付の軒棟瓦は藤原窯跡でも出土していない。

15-1は軒棟瓦で頭周辺が残る。瓦当文様は本田窯跡で出土した7-1に類似し、「羽原」の銘がある点も共通しているが、文様の両端に茎葉が1対ついている。再現性は良好で立体感に富む。釉薬は暗茶褐色で光沢は弱い。物原2表採。

15-2は瓦尻と棟の大部分を欠く。瓦当文様は15-1と同じ均整唐草文で再現性は15-1に比べてやや立体感に欠ける。上面の頭に近いところと側辺に熔着痕がある。物原2表採。

15-3は頭の一部で瓦当文様は中心飾りから2対の茎葉が伸びるデザインで棟側寄りに「大」の銘が入る。文様は立体感が弱くやや鮮明さに欠ける。釉薬は暗

茶褐色で光沢がある。物原 2 山上。

15-4 は棟と瓦尻を欠く。文様は中心飾りから 2 対の茎葉が伸びている。欠損部分があり全体の構成が把握できない 15-3 の瓦当文様と共にものと思われる。両端にはそれぞれ「大」「谷」の銘が入る。やや不鮮明で立体感も弱い。釉薬はやや暗い茶褐色で光沢がある。2箇所にハセの熔着痕が観察できる。物原 2 出土。

15-5 は棟と瓦尻を欠く。瓦当文様の構成は 15-1 に類似するものの茎葉が肉厚になっていて、両端の茎葉の位置も高くなっている。「ム一」の銘があるが、本田窯で出土した 7-5 と関連があるものと考えられる。文様の再現性は鮮明さにやや欠ける。釉薬は茶褐色で光沢はない。上面 2 箇所に熔着痕がある他に瓦当正面にも熔着痕がある。物原 2 出土。

#### 隅 瓦

屋根面が交わる部分に葺かれる瓦で軒棟瓦や棟瓦を隅切して使用される。

15-6 は棟部を隅切した軒隅瓦で当地方では「キリカラ」(切唐) という。切断面には上面側から半分まで分割線が入り、凸面側には焼成後の分割破面がある。分割線に沿って 2 つの針穴が開く。瓦当文様の構成は本田窯跡で出土した 7-3 と同じものである。しかしながら銘は異なり判読しがたいものが入っている。釉薬は黒色で生産年代が新しいことも推定されるため、藤原窯跡とは直接関連のない遺物の可能性も考えられる。焼成は良好である。長さ 27.1cm 幅 30.9cm を測る。物原 2 表採。

16-5 は瓦尻の一部が欠けるが、本田窯跡より出土した 8-1 と同じように隅切した瓦の不要な部分である。釉薬は頭に掛かるとともに切断面の分割線にも一部掛かっている。それ以外は裸胎である。両窯跡ともに隅瓦は焼成の後に分割されたものばかりで焼成の前に分割整形された形跡のある隅瓦は確認されていない。物原 2 山上。

#### 袖 瓦

袖瓦は屋根の妻側に葺かれる瓦で、葺かれる部位により袖板の付く箇所が異なる。

16-1 は瓦尻を欠く軒袖瓦で、瓦を葺く際に最初に葺かれるものである。通常棟が付く箇所に袖板が付いている。この瓦は棟のある瓦に比較して小さく、屋根の隅に葺かれることから「コスマ」(小隅) と呼ばれている。瓦当文様は 15-4 と

同じものだがより鮮明である。釉薬は茶褐色で光沢は弱い。幅24.8cmを測る。物原2出土。

16-2も瓦尻と袖板の一部を欠く軒抽瓦であるが、16-1とは反対側に袖板が付くものである。16-1が「コスミ」と呼ばれるのに対し、16-2は「オオスミ」(大隅)と呼ばれる。袖板の下端には装飾として条線が施されている。瓦当文様は15-1と同じもので彫りが深く立体感に富む。釉薬は暗茶褐色で光沢は弱い。釘穴は瓦尻に2箇所穿孔されている。熔着痕は2つ認められる。長さ27.4cm幅32.1cmを測る。物原2表採。

16-3は棟側の反対に袖板があり、「オオスミ」の上に葺かれる瓦で「オオソデ」(大袖)といわれている。なお、16-1のような「コスミ」の上に葺かれる袖瓦は「コソデ」(小袖)という。釉薬は茶褐色で光沢がある。施釉範囲は袖板のある部分は瓦尻にもおよんでいる。釘穴は尻に1つ開く。頭寄りに2つの熔着痕がある。長さ28.2cm幅31.1cmを測る。物原2出土。

### 燒斗瓦

棟に葺かれる瓦で、何段か重ねて葺かれる。

16-4は本田窯跡出土の8-2のように分割使用する「コシノ」に対して「オオシノ」という。釉薬は暗茶褐色で光沢はない。上面の一部と凸面には施釉されていない。長さ21.3cm幅21.2cmを測る。窯跡第3房出土。

### 雪止瓦

17-1と17-2は積雪時に雪が屋根から滑り落ちるのを防ぐ仕掛けを棟瓦に施したもので、当地方では単に「ユキドメ」(雪止)と呼ばれている。

17-1は棟のみがこのる個体であるが、頭に雪を止める板が確認できる。釉薬は光沢のあるやや暗い茶褐色でまだら状の黒変部分がある。物原2出土。

17-2は取手状の雪の崩落を防ぐ仕掛けがある個体で長さ26.9cm幅30.1cmを測る。釉薬は茶褐色で光沢がある。瓦尻に2つの釘穴が開く。上面にハセと思われる熔着痕が2つある。物原2出土。

### 棟瓦

瓦を葺く際に最も多量に使用する瓦で、両窯跡ともに瓦中で最も多く出土した種類である。当地方では「ナカブキ」(中葺)という。頭と瓦尻にそれぞれ切り込みが入り、尻側には釘穴の開くものがある。釘穴の数は1~2である。釉薬は

瓦尻を除いた上面に掛かる他に凸面の頭と側辺以外は掛からない。

17-3は一般的な棟瓦で欠損部位のない個体である。長さ27.3cm幅31.0cmを測る。釉薬は茶褐色で光沢がある。瓦尻に1箇所釘穴が穿孔されている。凸面頭寄りの棟に大きな熔着痕がみられる。物原2出土。

### 丸 瓦

本瓦葺では半瓦と組み合わせて使用されるが棟瓦葺では棟の一部に使用される。当地方では単に「マル」(丸)という。

17-4は棟が付く丸瓦で一部欠ける。釉薬は光沢のある茶褐色で端を除く上面全体に掛かる。釘穴が1つ開く。棟には2箇所に熔着痕がある。物原2表採。

### 雁 振 瓦

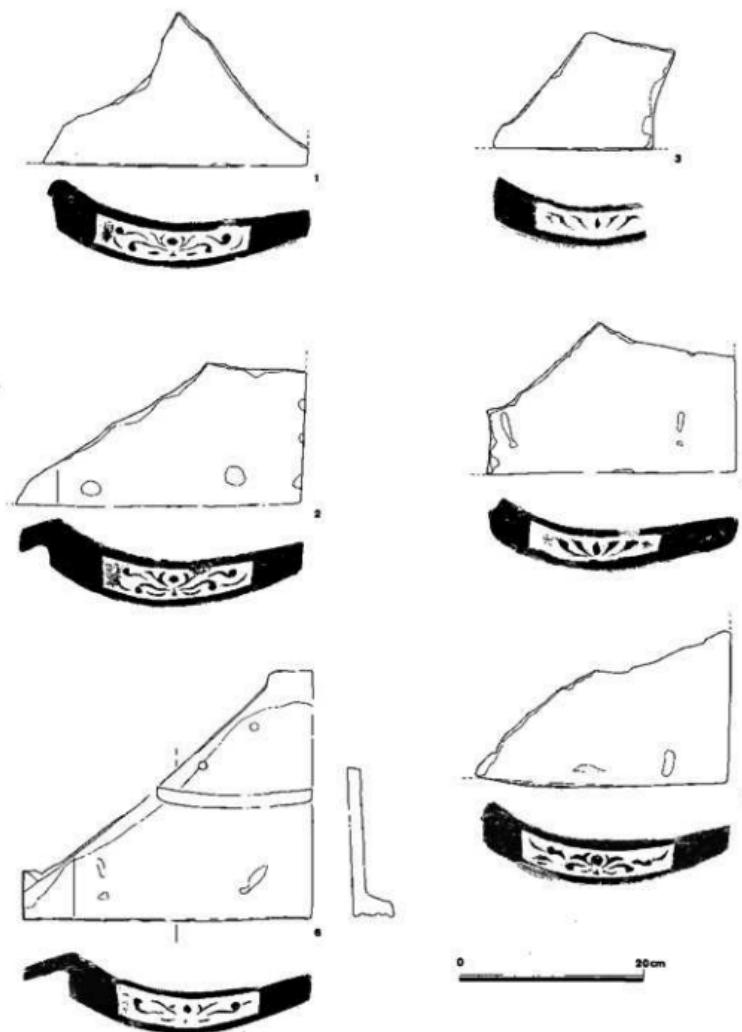
棟の最頂部に葺かれる瓦で雨水の流入を防ぐための棟が付く。

17-5は本田窯跡出土の緩やかな曲線を持つものと異なり稜線のある山形を呈するもので半分近くを欠く。釉薬は茶褐色でやや光沢に欠ける。瓦のほぼ中央、山形の頂部に釘穴が一つ開く。棟に2箇所の熔着痕がある。物原2表採。

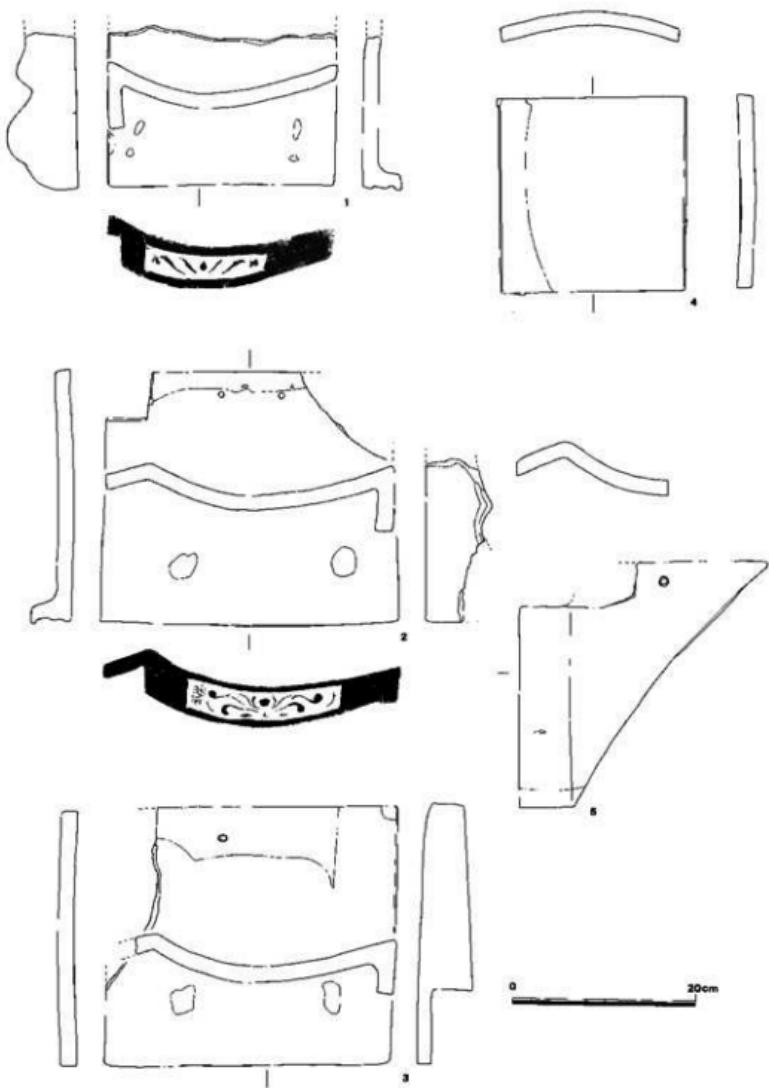
### その他の遺物

18-1は壺で基底部のみが残る。茶褐色の釉薬が掛かるが底面には掛からない。底面には「職工人 藤原代」と線刻があり、羽原のいずれかの窯で生産された可能性が強い。物原2表採。

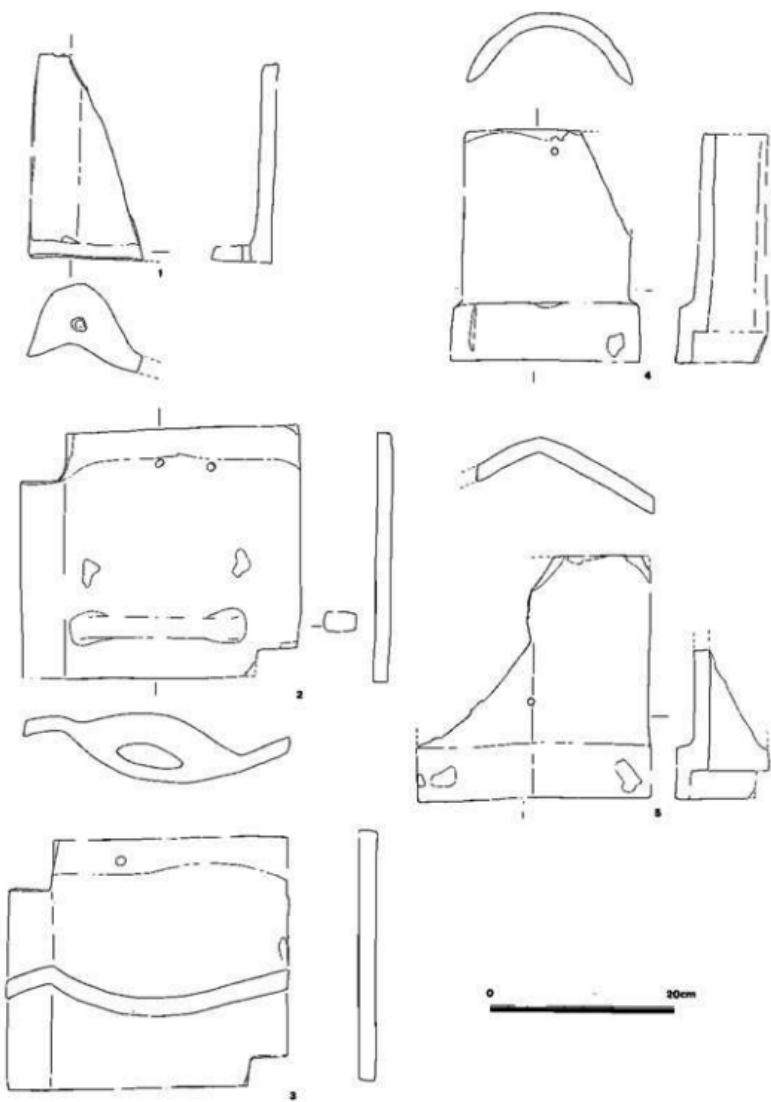
18-2も壺で下半部が欠ける。口縁部は外に広がらずに内を向いたままである。全体に茶褐色の釉薬が掛かるが一部掛かっていない部分も見られる。また、口縁部付近には熔着痕が認められる。物原2表採。



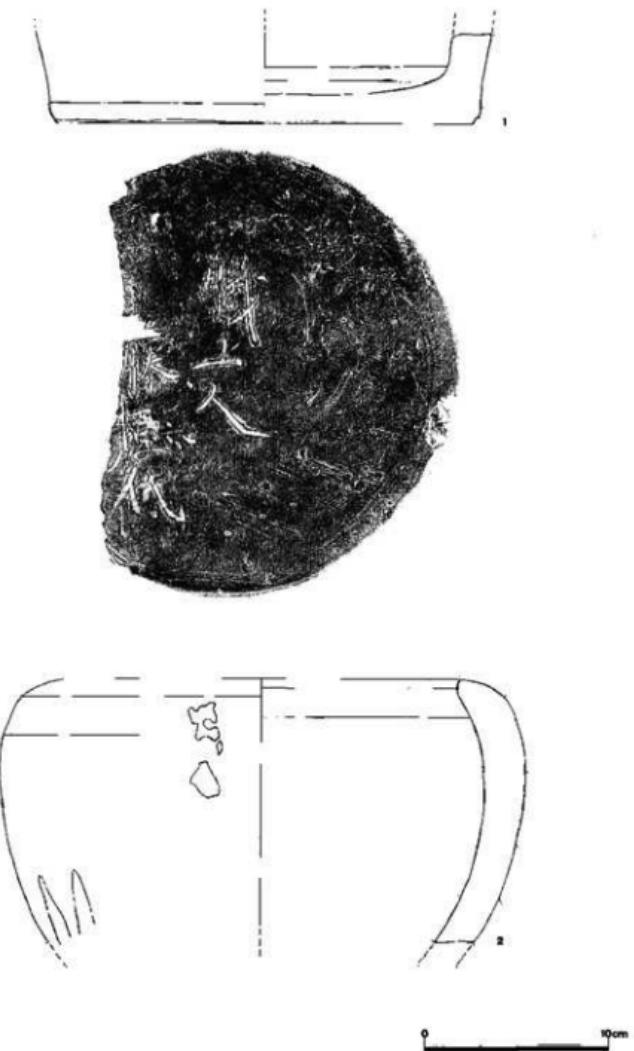
第15図 藤原窯跡出土遺物実測図 1



第16図 藤原薰跡出土遺物実測図 2



第17図 藤原窯跡出土遺物実測図 3



第18図 藤原窯跡出土遺物実測図 4

## V. まとめ

本田窯跡、藤原窯跡はいずれも良質な粘土が産出される羽原に立地し、近代に操業していた施釉赤瓦の窯跡である。今回の発掘調査は作業場も含めた窯業関連施設全体の確認調査ではなかったものの、窯跡の規模や物原を中心とした質量とともに豊富な遺物の調査検討により、羽原で瓦生産がかなりの規模で行なわれ、多くの雇用を創出して当地区の某幹産業の役割を果たしていた時期があったことが判明し、未解明の点が多い当地区の近代窯業史を考察するうえで大きな成果を得ることができた。また、益田市内では石見空港の予定地内の3箇所で近世の窯跡の調査が行なわれているが、藤原窯跡はこれらよりも房の内壁幅が約1.2m広いという特徴を持ち、天井は崩壊していたもののその他の部分は良好に残っていたことから、市内はもちろんのこと県内でも貴重な記録を保存することができたと評価できる。

さらに、遺物についても瓦や窯道具から当時の瓦の生産手法をかなり明確にすることができた。また、瓦当文様には数種類のデザインがあることが確認されている。これらの中には本田窯、藤原窯で生産されたものだけではなく、羽原以外の生産地から搬入されたと推定される「大谷」「八一」「八一」などの銘の入ったものもみられた。羽原では羽原共同組合、石見瓦購買販売組合時代に納期を守るために他地域で生産された瓦を購入して羽原産の瓦とともに販売していた事例も珍しくなく、今後これら資料の比較検討により、生産業者の変遷や業者間の提携関係などをかなり正確に推定することが可能になるなど、今回の調査によりさまざまな成果を得ることができた。

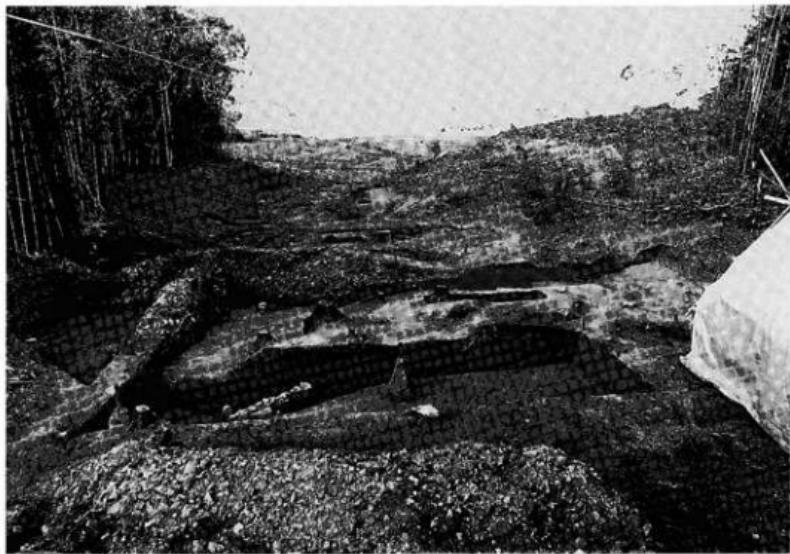
## 主要参考文献

- 1935 森 信美『石見赤瓦及び粗陶器の地理的研究』
- 1944 藤原孫三郎『羽原赤瓦の履歴書 羽原道路の履歴書 議員の改選記』
- 1952 矢富熊一郎『益田町史』上下巻
- 1962 青木 黙『中西の歴史』
- 1964 『石州益田瓦産地診断報告書』 島根県
- 1975 『益田市誌』上下巻 益田市誌編纂委員会
- 1988 『石見渦』第12号 江津市文化財研究会
- 1989 『石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報 I』 島根県教育委員会
- 1992 『石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書』 島根県教育委員会

# 図 版



本田塚跡 1



調査区全景（南から）



調査区全景（北から）

## 本田窯跡2



物原調査前（南東から）



物原断割り状況（南西から）

本田塗跡3



物原1（北東から）

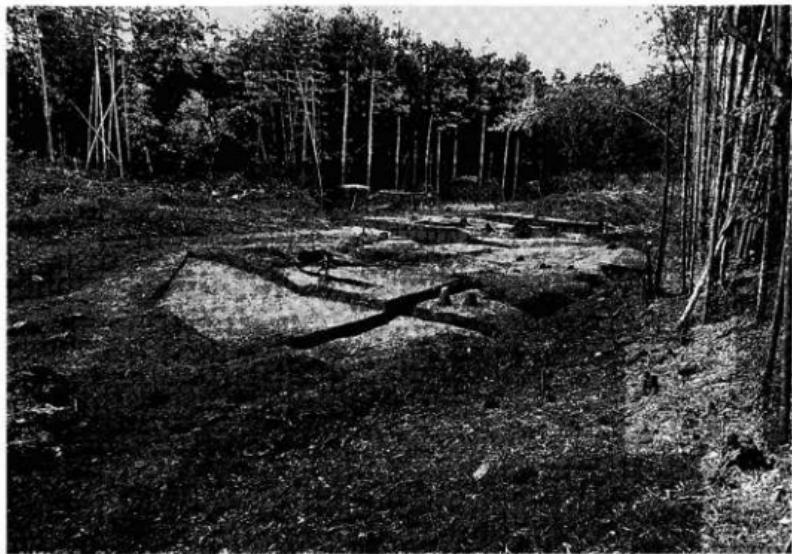


物原2（南西から）

## 本田窯跡4



物原2（北西から）

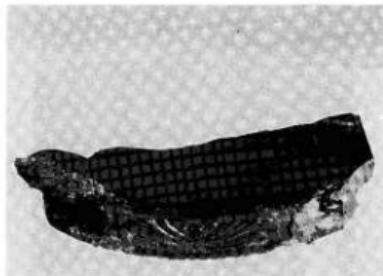


物原調査後（北西から）

本田窯跡 5



6 - 1



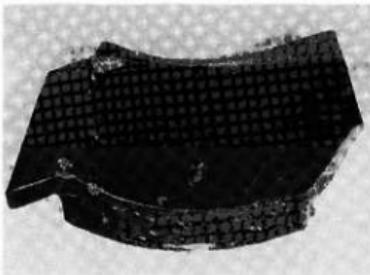
6 - 2



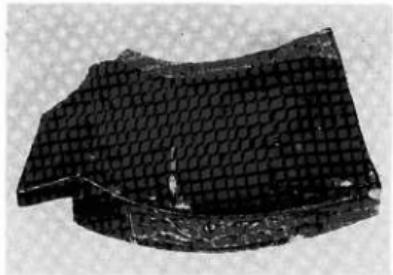
6 - 3



6 - 4

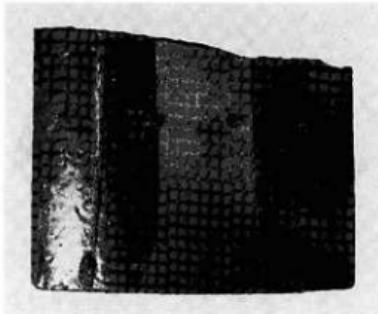


6 - 5

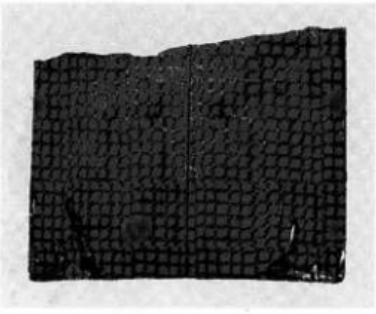


6 - 6

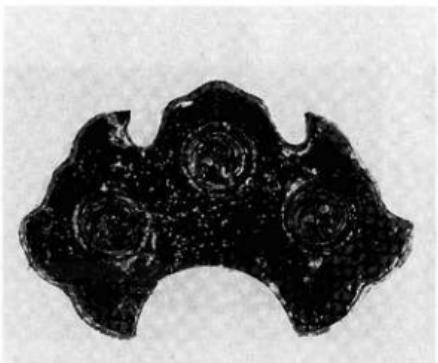
本田窯跡 6



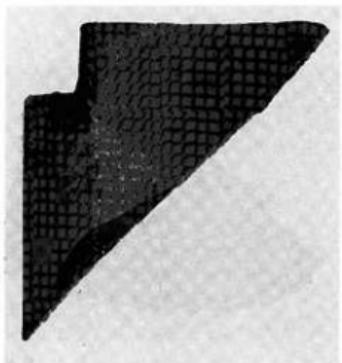
7-2



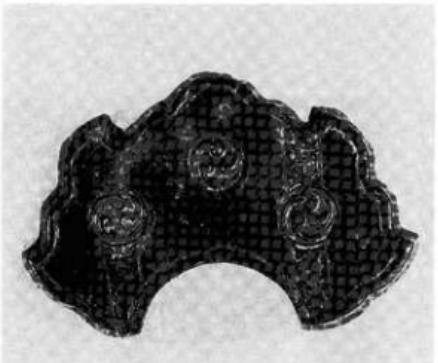
7-2



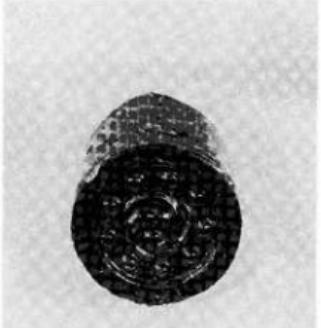
8-3



7-1



8-4



7-4

藤原熏跡 1



調査区全景（西から）



熏跡調査前（西から）

## 藤原窯跡 2



窯跡調査後（西から）

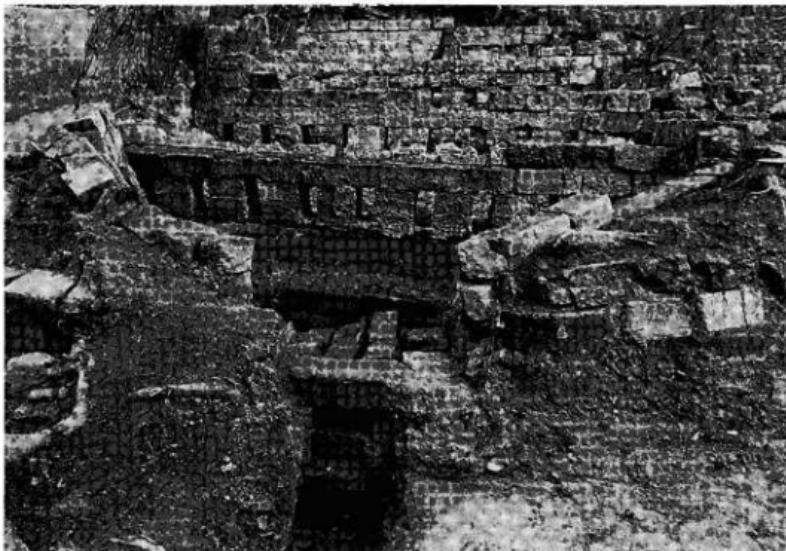


窯跡正面（1）

藤原窯跡 3

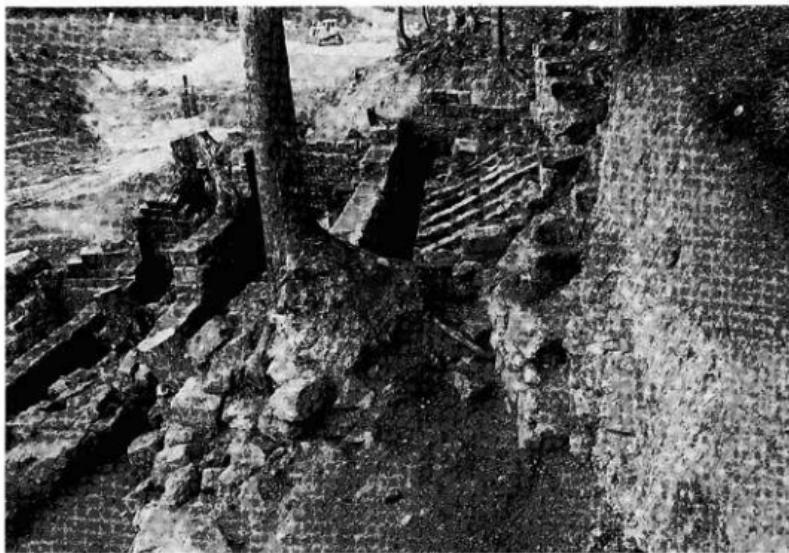


窯跡正面（2）



窯跡正面（3）

藤原窯跡 4



窯跡 第 5 房



窯跡 第 4 房

藤原窯跡 5



窯跡 第3房



窯跡 第2房・第1房

藤原窯跡 6



窯跡 大口

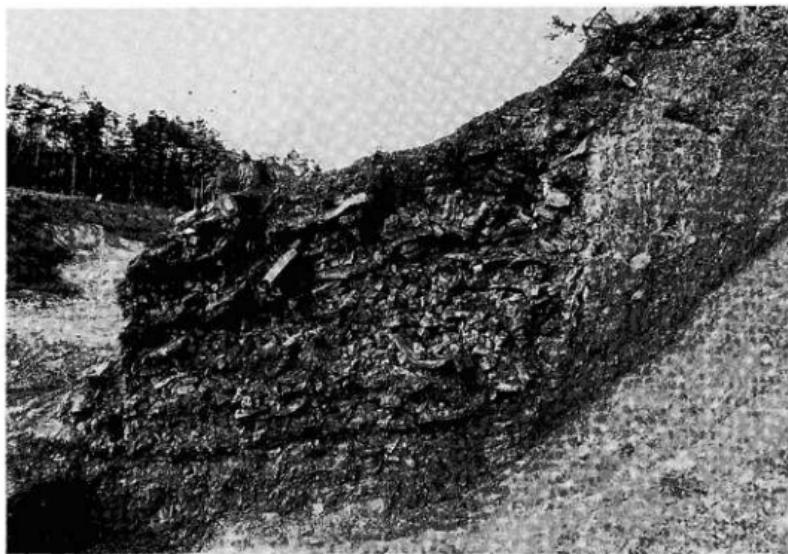


窯跡 焚き口

藤原窯跡 7



物原 1 断面 (南西から)

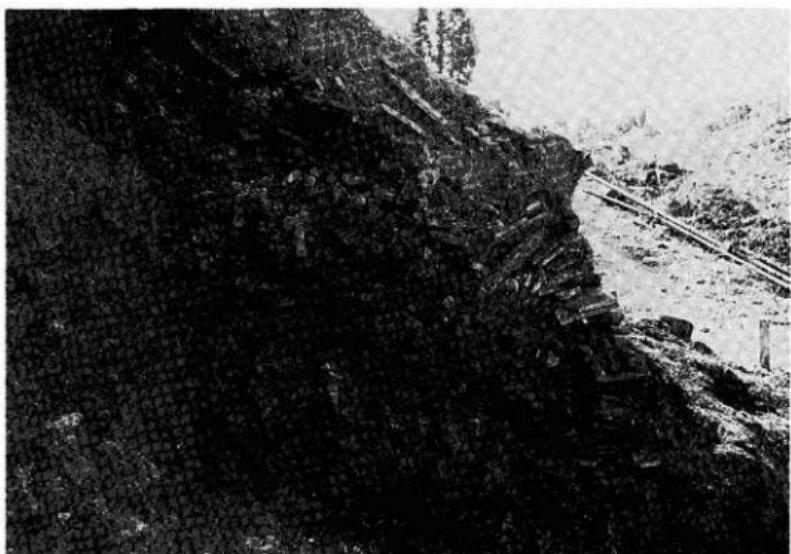


物原 1 断面

藤原窯跡 8



物 原 2 (北西から)



物 原 2 断 面

藤原窯跡 9

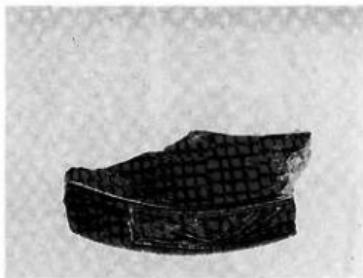


窯跡最上部断面図

藤原窯跡 10



12 - 1



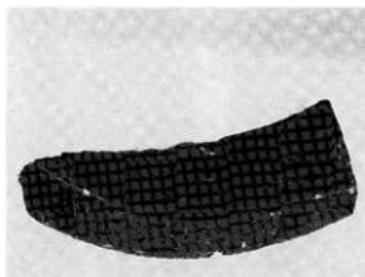
12 - 3



12 - 2



12 - 4

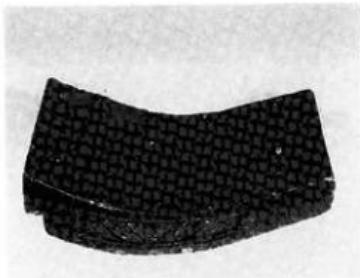


12 - 5



13 - 2

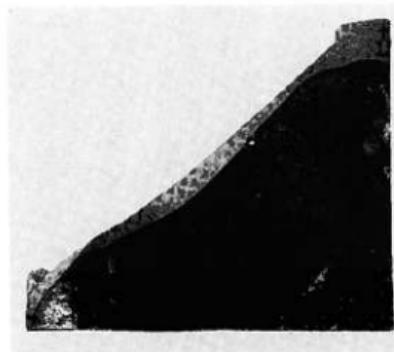
藤原窯跡 11



13-1



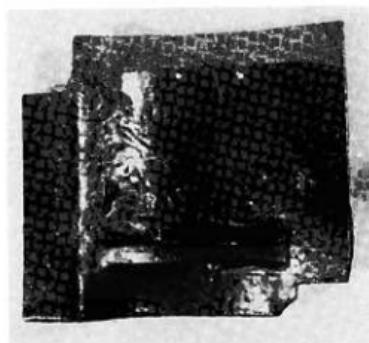
13-4



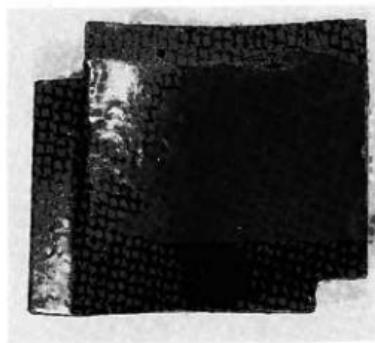
12-6



13-5



14-2



14-3



---

**益田拠点工業団地造成工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書**

平成8年3月発行

編集・発行 益田市教育委員会  
島根県益田市常盤町1番1号

印 刷 柏村印刷株式会社益田支店  
島根県益田市乙吉町イ336-9

---

